C O N T E N T S

VIEW21

［びゅーにじゅういち］

2012

Vol. 1

中学版

特集

3 「思考力・判断力・表現力」を評価し、育む

4 課題整理
「思考力・判断力・表現力」を育む評価の現状と課題

6 インタビュー
思考力などの見えにくい力を適正に評価し指導改善に生かす
東京大大学院教育学研究科教授◎秋田喜代美

10 学校事例1
「単元構成シート」や「文中式ノート検定」で思考力、判断力を測る
福岡県朝倉市立十文字中学校

14 学校事例2
ワークシートを工夫し、思考力を多面的に評価する
埼玉県宮代町立前原中学校

18 学校事例3
教科内外に発表の場を設け、生徒の考える過程を見取る
新潟県長岡市立東中学校

22 資料
「思考力・判断力・表現力」の評価と指導の実態

特別企画　キャリア教育実践のヒント

28 キャリア教育に取り組む上で、効果的な外部との連携とは？

連載

1 私を育てたあの時代、あの出会い
地道に真摯に全力で、生徒に向き合う大切さを教わった
東京都昭島市立清泉中学校校長◎小谷野茂美

26 ミドルリーダーの挑戦 ──前へ！前へ!!
研究主任というチャンスを生かし、学校全体、そして自身の授業力向上を図る
岡山県岡山市立福南中学校◎横林慎也

32 読者のページ Reader's VIEW／編集後記

*本文中のプロフィールはすべて取材時のものです。
また、敬称略とさせていただきます

*本誌記載の記事、写真の無断複写、複製及び転載を禁じます

http://benesse.jp/berd/ 本誌記事は、Benesse教育研究開発センターのウェブサイトでもご覧いただけます

私を育てた
あの時代、あの出会い
第9回

地道に真摯に全力で生徒に向き合う大切さを教わった

東京都 昭島市立清泉中学校校長 小谷野茂美 KOYANO SHIGEMI

教師は日々、さまざまな働き掛けの中で生徒を育てる。そして教師は、共に働く仲間との出会いの中で育っていく。出会いから学んだ教育の原点、そして次代を担う若い世代に伝えたい不易を、小谷野校長が語る。

こやの・しげみ　専門教科は家庭科。八王子市立第二中学校に新採で赴任後、青梅市立西中学校、東京都教職員研修センター研究部研究課長、東久留米市教育委員会参事などを経て、2010年度から現職。

- 1975（昭和50）八王子市立第二中学校に新採で赴任
- 1979（昭和54）青梅市立西中学校に赴任。赴任6年目に渡辺晴季校長が着任。3年間を共に過ごす。この頃、教育相談や心理学の勉強を始める
- 1990（平成2）東京都多摩教育事務所指導課指導主事に着任
- 2002（平成14）東京都教職員研修センター研修部企画課統括指導主事に着任
- 2005（平成17）立川市立立川第一中学校に校長として赴任
- 2007（平成19）東久留米市教育委員会参事に着任
- 2010（平成22）昭島市立清泉中学校に赴任

生徒の「心を耕す」指導を目指したい

新採の頃は、全国的に中学校が荒れていた時期でした。私は1年目から担任を任され、毎日懸命に生徒と向き合いました。校内で迷惑行為をする生徒を戒め、夜には学校を休んだ生徒の家庭訪問をし、生徒の声に耳を傾けるよう心掛けました。

2校目も生徒指導の厳しい学校でしたが、授業や学級経営を一通りこなせるようになっていた私は1つの疑問を抱き始めました。夜、問題行動が多かった生徒の家庭訪問をした時、生徒が帰り際に「今ならAは起きてるよ」と不登校気味にあった生徒の名前をぽそっと告げたのです。さっきまで私に注意され悪態をついていたのに、一方では友だちを思いやる心を持っている。一人ひとりは良い子たちなのに、なぜ学校では反抗的な態度ばかり取るのか。生徒の心の内を私は測りかねていました。

そうした時に出会ったのが、渡辺晴季（はるすえ）校長です。学ぶ環境を整えることが大切と言われ、窓から物が捨てられることが日常茶飯事だった中で、窓の下にある花壇に自ら花を植えて世話をされていました。温和だ

＊プロフィールは取材時（2012年3月）のものです

けれども、子どもとのかかわりの中で豊かな心をつむいでいこうという強い信念を持っていたのだと思います。単に禁止するのではなく、生徒の心に訴えられるような指導をしなくては――校長が率先して動く姿を見て、担任たちにも頑張って学校を変えようという機運が生まれました。

校長の姿は生徒の心も動かすようになりました。ある時、生徒が「校長先生が花壇で草むしりをしている姿を見て、物を捨てられなかった」と言ったのです。私は「やれば出来るじゃない」と生徒を褒めましたが、内心、衝撃を受けていました。好き勝手ばかりしている生徒に、その後ろ姿だけで大切なことに気付かせた。渡辺校長が日頃から話されていた「心を耕す」とはこういうことなのだと、私は渡辺校長が地道に諦めずに何事にも取り組む意味をやっと理解したのです。

もっともっと子どもの心と向き合っていきたい。私は教育相談や心理学についての本を読み、大学の講座に参加するなどして独自に勉強を始めたのです。

「生徒の全ては分からない。だからこそ心に寄り添いたい」

ぶれない芯を持って生徒にも先生にも向き合う

30代前半の頃、3年間担任をした女子生徒がいました。学校を休みがちで、素行の良くない男子生徒との付き合いもうわさされていました。私は1年生の頃から頻繁に家庭訪問をし、生徒に語り掛けていました。そうして3年生の半ばを過ぎた頃、生徒は家庭の事情で悩んでいることを打ち明け始めたのです。それは私にはどうすることも出来ない問題で、無力さをわびました。でも、生徒は解決など無理だと分かった上で、私が何年も向き合ってきてくれたことで信頼し、心の内を話してくれたのです。

残念ながら、教師が理解したり解決したり出来ない複雑な問題を抱えている生徒もいます。だからこそ、したり顔で指導をせず、生徒に寄り添い、実直に諦めずに向き合うことが大切だと思うのです。

本校に赴任した時、校内は整っているとは言えない状態でした。私はホウキとチリトリを持ち、朝、校内を回ることから始めました。次に、先生や生徒と一緒に教室や廊下の壁などを直し、学ぶ環境を整えました。そして、校則違反は徹底して許さないことを、先生方に呼び掛けました。駄目なものは駄目というぶれない姿勢を貫くことが、生徒からの信頼を得ることにつながるからです。

先生方には、生徒にとって良いと思うことはどんどん実践してもらっています。失敗もありますが、間違いは次に生かせばいいのです。先生たちに任せることが、私の役割だと思っています。

放課後、授業にあまり出ない生徒が校長室に来て話し込むことがしばしばあります。問題行動を起こすような生徒も、教師に聴いてほしいこと、訴えたいことがあるのです。校長になった今も生徒と向き合い、心を耕し続けていきたいと思います。

若手教師の発案で、学年・男女混合チームも参加できる球技大会を開催。小谷野先生の名前を冠した「SHIGEMI CUP」とし、盛り上がった。新入生に配布する学校紹介の冊子も若手教師が内容を考えて作成

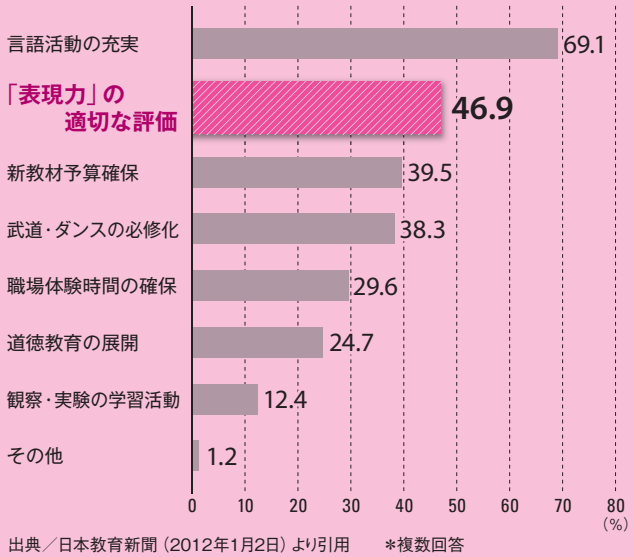
特集

「思考力・判断力・表現力」を評価し、育む

新課程では、「生きる力」の育成として、知識・技能の習得、思考力・判断力・表現力の育成などが目指されている。今回の特集では、特に「思考力・判断力・表現力」を育成するための評価と指導のあり方について考えたい。

校長の約47%が「表現力」の評価を懸念事項として挙げている

●新課程全面実施に伴う懸念事項（校長調査）



出典／日本教育新聞（2012年1月2日）より引用　＊複数回答

「思考力・判断力・表現力」を育む評価の現状と課題

読者アンケートやヒアリングの結果を見ると、「生きる力」の育成に向けて指導の工夫は進んでいるが、その力をどのように評価すべきかについて課題を抱えている教師が多いことが明らかになった。新課程で重視されている「思考力・判断力・表現力」を育むために、評価をどのように授業に取り入れ、指導改善につなげているのか。インタビューと3校の実践事例から考える。

現状と課題

事例校の先生方の声から

◎多くの生徒は問題を形式的に捉えているだけで理屈が分かっていないため、言葉で説明できません。例えば、「移項」という作業を「左辺と右辺が常に成り立つように、両辺に加減乗除した結果、移動したように見えている」と理解して処理しているのか、「方程式では符号を変えて反対の辺に移動させる」と機械的に処理しているのかでは、理解までの思考のプロセスや定着度は大きく異なります

◎電圧計の回路へのつなぎ方を質問されて「並列です」と答えられても、実際につなげさせようとすると、つなぎ方やその順序が分からない生徒が多くいます。知識はあっても実際に手を動かし、頭を働かせて理解していないので、生きた知識として身に付いていないのです

『VIEW21』中学版 2011 Vol.4 読者モニターアンケート結果から

◎テストでは数値で定着度を測ることが出来ますが、「思考力・判断力・表現力」をどのように評価し、力を付けさせていくか。そのための具体的な活動や授業の工夫はどうすればよいのでしょうか

◎現状では知識・理解の評価に偏っています。技能や思考・判断・表現などの評価を重視したいので、ペーパーテスト以外の評価方法を知りたいです

◎グループ学習に取り組んでいますが、活動の中での生徒一人ひとりの思考過程をどう把握すればよいのか分かりません

「思考力・判断力・表現力」を評価し、育む

「思考力・判断力・表現力」を評価し、育む上で大切なこと

インタビュー　東京大大学院教育学研究科教授　秋田喜代美 …… P.6

◎教科や単元ごとに「どのような力を育てたいか」というねらいを焦点化する

◎生徒同士のかかわりを通して、思考している内容を表現させ、違いやズレの根拠を考えさせる

◎生徒の自己評価や相互評価を取り入れ、評価の視点や視野を広げる

◎ワークシートなどを有効活用し、効率的に定着させる部分と、深く考えさせじっくり思考過程を見取る部分のめりはりを付ける

「思考力・判断力・表現力」を評価し、育むための工夫

学校事例 1　福岡県朝倉市立十文字中学校 …… P.10

◎「単元構成シート」を活用した単元途中の形成的評価や、「文中式ノート検定」で生徒の定着度や思考の変容を丁寧に見取る

◎研究授業評価指標（ルーブリック）を用いた授業整理会を行い、生徒の学力や表現力が高まったかどうかを客観的に確認し、指導改善につなげる

学校事例 2　埼玉県宮代町立前原中学校 …… P.14

◎「生きた知識」として活用できる力が身に付いたかを見取るために、生徒が自分の視点で観察、実験した結果を表現できるようにワークシートを工夫

◎生徒の考える過程を見取りやすくするために、図や絵で表現させるなど、「思考や判断を伴う表現」の方法に自由度を持たせる

学校事例 3　新潟県長岡市立東中学校 …… P.18

◎口述試験やペア活動を取り入れ、理解するまでの思考・判断の過程を可視化し、見取る

◎思考や判断を伴う発表力・表現力を見取り、育む場として教科外活動「教科の広場」や行事を活用

インタビュー

思考力などの見えにくい力を適正に評価し指導改善に生かす

東京大大学院教育学研究科教授　秋田喜代美

「生きる力」を育てるには、思考力や判断力、表現力などの育成が欠かせない。しかし、これらの力は見取りが難しく、評価の仕方に困っているという声も聞かれる。そこで、東京大大学院の秋田喜代美教授に、これからの生徒に育てたい力と共に、そのために必要な評価の視点についてうかがった。

中学校の役割として生徒に育みたい4つの力

新課程の全面実施は、生徒に育てたい力を改めて考える良い機会と言えるでしょう。学校全体で考えたことを共有し、指導や評価に生かしていくことで教育の充実が図れます。

中学校教育の基本的な役割は、教養を持って社会に参画する市民を育てること、そして豊かな人生を過ごすためのベースとなる力を身に付けることだと、私は考えています。そのために、中学校で生徒たちに付けたい力を4つ挙げたいと思います。

1つめは、「**他者と共に生きる力**」です。他者と共に学び合って生きていくことは、社会生活を営む上で必須の素養と言えるでしょう。2つめに、「**学び方を学ぶ力**」が挙げられます。中学生の時期から、先達が積み上げてきた知識や道具などを使って自分を高める力を、是非とも育てたいです。3つめに「**情報を正しく選択して活用する力**」も、情報が溢れる社会を生きていく上では不可欠でしょう。そして、中学生は自分の可能性を知り、適性や興味に気付いていく時期ですから、4つめとして「**自分のあり方を学ぶ力**」を育てることにも注力してください。

これら4つの力は、基本的に授業を中心とした学校生活を通して身に付けるものだと思います。例えば、国語で文学の楽しみ方を理解したり、体育で運動技術を学んだりすることが人生を充実させるように、本来、どの教科も生徒自身や生徒の生活と深い接点があります。しかし、高校受験だけを意識した指導が主体になると、授業の学びが生徒自身と切り離されてしまい、勉強が「つまらない」と感じられてしまいます。その結果、生徒は学びに向かわなくなり、力も身に付いていきません。生徒の生活と学校の学びや、他者のつながりを持った授業をつくることで、生徒は授業に充実感を感じます。このような授業を通して4つの力を身に付けること。それが、中学校教育の役割だと、私は考えます。

評価規準を活用しつつ教師が主観的に見取る

4つの力は新課程では「生きる力」として表現され、中でも思考力、判断力、表現力の育成は重視されています。これらの力は定期考査で測ることが難しいのが現状です。しかし、子どもの力を育むためには、これらの力が子どもにどの程度身に付いているかを適正に評価し、指導を改善することが不可欠です。

では、思考力、判断力、表現力を評価するためには、何が必要なのでしょうか。

前提となるのは、教科や単元ごとに「どの

「思考力・判断力・表現力」を評価し、育む

ような力を育てたいか」というねらいを焦点化することです。おのずと生徒に出す課題は精選されるでしょう。中学校では指導内容が多いですから、授業を効果的、効率的に進めるためにも課題の精選は欠かせません。

そして、生徒が課題に取り組む中で、実際に生徒が何を考え、表現したかを丁寧に見取り、指導改善に生かすことが大事です。ねらいに対する「成果」を確認することも重要ですが、同時に生徒の思考の「過程」に目を向けることが、思考力、判断力、表現力などを育てる上では不可欠と考えてください。教師はそうした視点で授業を振り返り、ねらいを達成するために、どのような説明や問い掛け、また課題の設定がより効果的であったかなどを考えることで、次の指導を充実できます。

生徒の思考力などを評価するために、教科を超えて統一した評価規準を作成している学校もあるでしょう。そうした評価規準は、「言語力のこの部分を大事にしよう」「論理的に説明する力を育てたい」など、学校全体の指導の方向性を明確にして共有する上では有効です。その半面、全てをチェックシートの項目に沿って評価するなど、客観性が過度に重視されると、教師個々の専門的な判断が働かなくなり、一面的な評価となる恐れがあります。評価規準は一つの道具として活用しながら、授業中の生徒の言動や生徒同士のかかわり合いなどを、教師が専門家の見識に基づいて主観的に見取り、生徒一人ひとりへの支援を考える必要があるでしょう。

あきた・きよみ◎東京大学院教育学研究科博士課程修了。博士（教育学）。専門は教育心理学、授業研究。立教大文学部助教授などを経て現職。主な著書は『授業の研究 教師の学習』（共著、明石書店）、『授業研究と学習過程』（共著、放送大学教育振興会）、『子どもをはぐくむ授業づくり―知の創造へ』（岩波書店）など。

指導と評価の一体化を実現させる3つの視点

では、思考力などを見取り、評価するための具体的な視点について説明したいと思います。

①生徒同士のかかわりを通して、思考している内容を表現させる

生徒1人で学んでいる時は、思考力、判断力、表現力などがどのように働いているかは見えません。ペアや小グループで、学級全体で話し合わせると、違いやズレが表れ、自然と思考や判断の根拠や理由を語り始めます。

例えば、ある授業で「元寇の時、元は混成軍だから負けた」という説明を理解しきれていない生徒がいました。そのまま次の学習に進んでいたら、生徒の確かな理解と定着は得られなかったでしょう。しかし、授業では生徒同士の話し合いがありました。すると、生徒の目線から「史料を見ると元軍は服装がまちまちだ」「中国は大きな国だから言葉や食文化も違って1つにまとまらなかったのだろう」「逆に日本は一致団結して必死に戦った」といった考えが出て、その生徒は納得した様子でした。教師の説明を一生懸命にノートに書いて分かったつもりでも、納得できていないことはよくあります。そうした時、生徒同

＊プロフィールは取材時（2012年3月）のものです

士が自分たちの言葉で話し合うことで「腑に落ちる」ことは、どの教科でもあるのです。

生徒同士が自分の言葉で説明し合う状況を意図的につくり出すことで、教師は個々の生徒の思考力などを評価できます。逆に、教師が一方的に話す指導では、評価は定期考査に頼らざるを得ず、しかも評価の対象は知識が中心となります。

学んだことを文章で振り返らせるのも良い方法です。これは、話し合いを通して自分の考えがどのように変化したのかを生徒自身が実感でき、「次はこんなことを学びたい」といった気持ちが芽生え、次の学習への意欲と具体的な知識のつながりを生む利点もあります。特に、中等教育では子どもに成長している実感を持たせることが大切な時期です。こうした振り返りの学習を重視するとよいでしょう。

②生徒の自己評価や相互評価を取り入れる

知識を測る定期考査とは違い、思考力などの評価を教師1人で行うのは、生徒の人数を考えても難しいですし、主観に偏るという問題もあります。そこで、生徒の自己評価や相互評価を取り入れてみてはどうでしょう。

先生方は自分なりの観点で生徒を見取っていると思いますが、「自分はここを頑張った」などと生徒に自己評価をしてもらうことで、見えていなかった点に気付かされることもあります（**図**）。

図　自己評価・相互評価を取り入れた評価表

国語研究録評価表　平成２４年　月　日

国研のタイトル（　　）

年　組　番　名前

【国語研究録の振り返り】

	達成できる（A）	少し努力を要する（B）	さらなる努力を要する（C）	自分	友人（　）	教師
テーマ	対象または方法が、国語の学習でこれまで学んできたことに深くつながっている。	国語の学習で学んできたこととは少し関係があるが、強いつながりとは言えない。	本人にとっては大切なのかもしれないが、国語の学習で学んできたことに関係がない。			
紹介	多くの文献に当たっていて、その内容について読者に知識がなくても理解できるように書いている。	書かれたことに間違いはないが、内容が難解で、知識がなければ理解できない。または、少ない文献にしか当たっていない。	書かれたことはつじつまがあっておらず、情報できそうにない記述である。または、全く文献に当たっていない。			
調査	独自の調査が行われ、調査方法や調査結果がきちんと書かれている。	独自の調査が行われているが、調査方法や調査結果がきちんとは書かれていない。	独自の調査が行われていない。（本やHPに書いてあることを写すのは調査ではない。）			
考察	テーマについて、自分の考えが論理的に筋道立てて述べられている。	テーマについて、自分の考えが述べられているが、根拠が薄く、思いつきに近い。	テーマについて、他人の考えが紹介されているが、自分の考えが述べられていない。			
表現	文章が分かりやすく、レイアウトも読みやすく工夫されている。	文章あるいはレイアウトに問題があり、少し読みづらい。	文章が読みにくく、レイアウトも雑で、大変読みづらい。			
総合評価	1項目につき、A：20点、B：10点、C：0点で換算し、1年40点以上、2年60点以上、3年80点以上なら…A　1年30点以上、2年50点以上、3年70点以上なら…Bをつける。					

文章による振り返り（2年生は前年、3年生は過去2年間の振り返りも書く。）

【国語研究録の取り組みやプロセスでの振り返り】

1．テーマ設定について
（「テーマをどのように決めたか。」「なぜ、そのテーマにしたか。」「調査が進むにつれて、どのようにテーマが変わったか。」「そのテーマでよかったか。」「3・2年間国語研究録に取り組んできて、テーマにつながりはあったか。」等）

2．調査について
（「参考文献や資料にどのように見つけたか。」「見つけられなかった、あるとよかった参考文献や資料はないか。」「調査はどのように進めたか。」「アンケートをとるとき工夫した点はないか。」「考察するときに調査を活かすことができたか。」「工夫した点や苦労した点はないか。」等）

3．表現について
（「レポートにまとめる上で、苦労した点・工夫した点はないか。」「文章で表現する上で、苦労した点・工夫した点はないか。」「読み手を意識して書けたか。」等）

4．評価について
（「クラスメートのレポートを読み、観点を持って評価できたか。」「自分や仲間のレポートの良い点や改善点に気づけたか。」「よい点や改善点をアドバイスできたか。」「各々のレポートから内容的に、表現的に、学び合うことができたか。」「国語研究録をみんなで読み合い、学び合いを活かした後輩たちへの“国語研究録紹介資料”を作成できたか。」等）

5．その他
（「参考にした先輩のレポートは何か。また、なぜ参考にしたのか。」「参考になった授業は何か。」「昨年の国語研究録振り返りや、先輩からの“国語研究録紹介資料”を活かすことはできたか。」「見通しを持って取り組めたか。」「研究の途中や振り返りの時に、参考になった意見はないか。」「印象に残っている友だちの言葉やそこから気づいたことはないか。」等）

《調査》国語研究録を1年で1テーマ3年間で3回作成することについてどう思うか。
また、国語研究録をクラスで1冊にまとめること、図書室に保管することについてどう思うか。

福井大教育地域科学部附属中学校国語科では、「国語研究録評価表」の左ページにある「国語研究録の振り返り」や話し合いによって生徒が自己評価・相互評価を行った後、更にさまざまな観点から自分の学びを「国語研究録評価表」の右ページにある「国語研究録の取り組みやプロセスでの振り返り」で詳細に振り返る。また、福井県では「福井県中学校教育研究会　特別活動部会」が、福井県内の中学校に「自分でつける通知表」を提案している。必要に応じて、各校が自校用にアレンジし、生徒が自己評価を行うこともある

＊秋田先生提供の資料をそのまま掲載

「思考力・判断力・表現力」を評価し、育む

同様に、生徒の相互評価を行うと、教師の視野が広がり、知らないところで生徒が助け合っていたり、考えを深め合っていたりしていることが分かり、更に生徒同士の認め合いの関係を育むことも出来ます。相互評価は、いわゆる一斉型の指導では出来ません。生徒が自分たちで考えたり確かめ合ったりする協働型の学習活動を通して、互いの評価が生まれるからです。そういう意味でも、指導と評価は一体となっているのです。

中学生であれば、生徒自身が評価規準をつくることも出来るのではないでしょうか。例えば、レポートを書く前に、どのようなポイントを押さえるべきかを生徒に発言してもらいます。「相手に伝わりやすく書いている」「自分の言葉で説明している」など、さまざまな観点が出てくるでしょう。それらは、いわゆるメタ認知となり、レポートを書く際に強く意識されるようにもなります。最後に、自分たちのつくった評価規準に沿って振り返りをさせれば、更に学習を発展させられます。

③ワークシートなどを活用し、指導と評価を効率化

中学校では、基礎的・基本的な知識や技能の定着をおろそかに出来ません。土台となる知識や技能がなければ、思考や表現をすることが出来ないからです。ワークシートやテスト、ドリルなどを有効活用して、効率的に定着させたいところです。

新学習指導要領によって学習内容が増えましたから、これからは、授業の中で効率的に定着させる部分と、深く考えさせる部分のめりはりがより大切になると思います。例えば、ある学校の古文の授業では、文法事項の答え合わせの時、生徒を一人ひとり指名して発言させるのではなく、活用形の正答を生徒が集中して採点できる速度でパソコンから映し出し順に進めて指導されていました。そのような指導の効率化に向けて、電子黒板やパソコン、ＩＣＴ技術などの活用にも力を入れていただきたいと思います。

校長に求められるナレッジ&タイムマネジメント

校長先生に意識していただきたいのは、指導と評価の一体化の基盤となるのは授業研究だということです。教師が互いに授業を見せ合い、単に評価規準の観点のみでチェックするのではなく、どのような生徒の姿が見られたか、学習課題はふさわしかったかなどを議論してください。課題は全ての生徒にとって考えさせる題材であったか、分かる生徒にとってはあまり考える必要がない題材ではなかったかなど、特に課題の設定は授業の根幹にかかわる議題となります。

既存の評価規準で生徒の実態を十分に捉えられるかも検討しましょう。評価規準は常に実践と結び付きながら改良を重ねることが大事です。すなわち、校長先生には学校全体でどのような授業をつくるかというビジョンを持ち、それに応じた学習活動や課題になっているか、そして評価が連動する形になっているかをチェックしていただきたいと思います。

先生方は極めて多忙ですから、生徒を丁寧に見取るためには学校運営のスリム化も不可欠でしょう。最初にどのような生徒を育てたいかを考え、それとかかわりのない行事は精選するという決断が必要かもしれません。そういう意味では、校長先生には、先生方に対するナレッジマネジメントと共にタイムマネジメントが求められていると言えるでしょう。

評価規準を最初から細かくつくるのは、手間が掛かります。他校や外部機関が作成した出来のよいものを見本として、自校の実態に合わせてアレンジするなど、外部のリソースも有効に活用していただきたいと思います。

教師が行う見取りや評価は複雑で、その手段もさまざまですが、教師が最も手応えを感じるのは、自分が出した課題に生徒が食いついて、生徒同士がつながり、理解や思考が深まっていく実感を得られた時でしょう。そうした主観的な判断に、教師の専門的な見取りがあると思います。だからこそ、校長先生を中心に、付けたい力が本当に身に付いたかどうかを十分に検討しながら、思考力などを含めた「生きる力」を育む授業をつくり上げていただきたいと思います。

学校事例 1

「単元構成シート」や「文中式ノート検定」で思考力、判断力を測る

福岡県 朝倉市立十文字中学校

朝倉市立十文字中学校では、形成的評価を取り入れた単元構成と共に「単元構成シート」や「文中式ノート検定」を通じて生徒の思考力や判断力の伸びを把握している。併せて、教師の生徒を見取る力を組織的・効率的に高めていくために、ルーブリックを活用した授業改善システムを構築し、より質の高い授業の実現を目指している。

形成的評価を行い 達成度に応じて授業を変える

朝倉市立十文字中学校では、佐々木隆良校長の下で、授業改善・評価、キャリア教育の充実などの学校改革に取り組んできた。佐々木校長は学校の現状を次のように話す。

「本校の生徒は純朴ですが、地域唯一の中学校であり、切磋琢磨する経験の少なさからか競争心が希薄で、自ら目標を立てて頑張る力が弱いと感じています。以前よりも都市部で仕事をする保護者が増え、『少しでもいい高校や大学に進学させてほしい』『子どもを大切に育ててほしい』という要望は年々強くなっているように感じます。確かな学力を保証し、地域の未来を支える社会性と公共性を身に付けた人材を育てなければならないという使命を感じています」

同校が目指すのは、未来を切り開く力の育成だ。そのためには、生徒が高い志を持ち、自ら学び続ける力を身に付ける必要があると考え、教科指導や「総合的な学習の時間」、課外活動など、あらゆる活動をこの力の育成の下に位置付け、学校改革を進めてきた。

教科指導では、各教科の授業内容を素材として活用しながら、知識や技能を身に付ける「習得サイクル」と、自分でテーマを設定し追求する「活用サイクル」の2つのサイクルを、相互に変化・作用させながら学びを循環させる力を身に付けてほしいと考えている。

そこで、同校が行う工夫の1つは、形成的評価を取り入れた単元構成だ。形成的評価とは、通知表や指導要録のための評価とは異なり、教師が生徒の学習理解度を把握し、授業改善やカリキュラムの修正に生かすために行う評価のことだ。同校は、単元開始前に行う「診断的評価」、単元の途中で行う「形成的評価」、定着度を測る「総括的評価」の3つを組み合わせて単元を構成している（**図1**）。

School Data

◎1977（昭和52）年開校。福岡県から2011年度に「ふくおか学力アップ推進事業」、12年度に重点課題研究の指定を受け、「基礎・基本を習得・活用する学習活動の創造～形成的評価を位置づけた単元構成の工夫を通して」に取り組む

校長◎佐々木隆良先生

生徒数◎149人　学級数◎8学級（うち特別支援学級2）

所在地◎〒838-0023　福岡県朝倉市三奈木十文字3710

TEL◎0946-22-3106

URL◎http://www.asakura-fko.ed.jp/jumonjichu/

公開研究会◎2012年11月15日（木）

「思考力・判断力・表現力」を評価し、育む

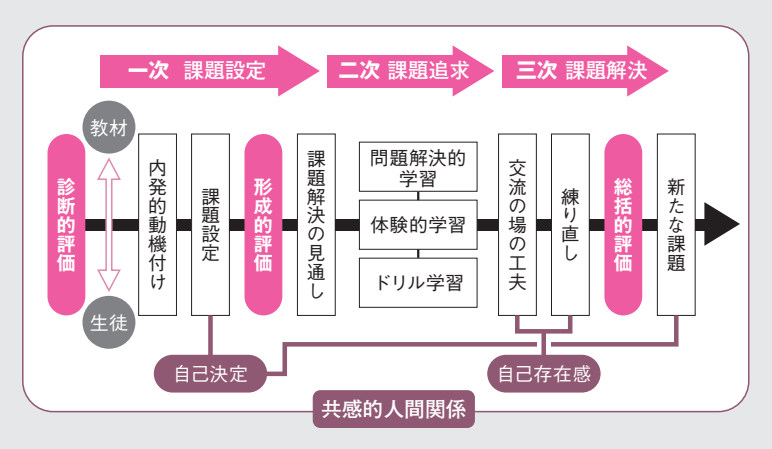
診断的評価は、単元に関する知識について生徒の理解度や習熟度を把握することを目的とし、単元開始前の授業や朝学習の時間に小テストの形で行う。研究主任の和田淳子先生はこう説明する。

「教師の想定よりも小学校での学習内容を理解していない、逆によく理解しているということはよくあります。教師の感覚ではなく、目の前の生徒の理解度や課題に応じて授業の導入や単元構成を考えることが大切です」

単元がある程度進んだら、形成的評価として、単元前半の理解度の確認と、理解に至るまでの思考や判断の過程を見取るグループワークやワークシートを出す。この結果を基にその後の授業内容を修正し、最後に総括的評価で定着度を測る。

「形成的評価を位置付けた単元構成を意識して取り入れることで、授業前後の生徒の思考や判断の変化をより丁寧に見取ることが出来るようになりました。これらは効率的に授業改善を行っていく上でも役立っています」

図1　単元構成の基本的なモデル



＊同校の資料を基に編集部で作成

予想と結果のズレが学びへの期待感を高める

この3つの評価を柱としながら、毎時間の授業でも生徒の思考力、表現力の見取りを心掛ける。数学科担当の和田先生の「確率」の授業を例に、その方法を見てみよう。

参観したのは、「一次　課題設定」に当たる内発的な動機付けや課題設定を意識した「サイコロの目の出方を調べる方法を考える」授業だ。まず生徒に「☆が3つ、○が2つ、×が1つ書かれたサイコロ2個を同時に転がした時、一番出やすい組み合わせは何か」という課題を問い掛ける。生徒の予想は、☆2つが16人、☆○が1人、他は0人だった。次に「どのように予想を確認すればよいか」と生徒に質問し、生徒が提案した3つの方法でそれぞれグループに分かれて確認した。2個のサイコロを転がして出た目を記録するグループ、樹形図をつくり、出る目のパターンを図示化するグループ、表を使ってサイコロの組み合わせを全て書き出すグループである。3つのグループの解答は、いずれも「☆○の組み合わせが最もよく出る」だった。これを受け、和田先生は「☆は3つもあるのに、どの方法で調べても☆○が多いのはなぜか」と生徒に投げ掛けた。

「それぞれの方法で自分の手を動かし、自分たちが出した答えと予想のギャップを感じてほしいと思いました。『なぜ』という疑問が『知りたい』という欲求につながるからです」

朝倉市立十文字中学校校長
佐々木隆良　ささき・たかよし
「学校の使命を果たすために、巻き込み巻き込まれる関係が出来るシステムを構築したい」

朝倉市立十文字中学校教頭
堺　和弘　さかい・かずひろ
「時代は変わっても教育の不易と流行を見極めて、今求められる最善の教育を提供したい」

朝倉市立十文字中学校
朝妻浩慶　あさづま・こうけい
主幹教諭。「教育者としての誇りを持ち、生徒や家庭・地域が誇りに思う学校をつくりたい」

朝倉市立十文字中学校
和田淳子　わだ・じゅんこ
研究主任、数学科。「『竹』のように真っすぐに伸び、強く、しなやかな生徒を育てたい」

＊プロフィールは取材時（2012年3月）のものです

「単元構成シート」で思考力・表現力を測る

和田先生が生徒の思考力・表現力を見取る上で重視するのは、生徒が記入する「単元構成シート」だ。「今日のまとめ」にその日の授業で新しく分かったこと、「振り返り」には①感想、②記述、③検討、④反省、⑤発展（気付きや疑問）を書く。和田先生は、生徒が⑤発展まで書けることを目標としている。

「本校では、計算問題の正答率は比較的高いのですが、文部科学省の全国学力・学習状況調査のB問題のような活用力を問われる問題では正答率が下がります。日頃から自分の思考を振り返り、言葉で説明することが、活用力や表現力の向上につながると考え、単元構成シートを活用しています」（和田先生）

1年生のうちは感想を書くだけの生徒が多いが、慣れるにつれて反省、発見、疑問といった新しい気付きも書くようになるという。今回の授業は単元の導入部分だったこともあり、多くの生徒が「なぜ☆○が一番多いのか知りたい」「なぜ予想とずれていたのかを調べたい」と書いていた。思考の振り返り、表現力という意味ではまだまだだが、単元に対する期待を強く抱いた様子はうかがえた。

その後の授業は、「二次　課題追求」「三次　課題解決」の前にそれぞれ小テストを行い、定着度も踏まえながら授業を進める。この小テストの結果は少人数授業のグループの分け方にも活用する。また、グループは単純分割、習熟度別、本人の希望別など、単元の特性や授業のねらいに応じて変えている。

「習熟度や本人の自己決定を踏まえた学習の場を設けることで、基礎・基本の習得はもちろん、自分で設定した課題を解決する力が身に付きます。また、グループで自分の考えを伝え合う活動を取り入れることで、生徒が自分と異なる考えに気付く姿や過程を見取ることも出来ます」（和田先生）

このように、書かせたり話したりする活動を通して、生徒の思考や判断を可視化し、見取る活動は全ての教科で行っている。例えば、保健体育では、最初に試しのゲームを行い、その結果を基に課題を設定、有効な戦術や練習を考えさせ、文章や図にかかせる。これにより、「Aはオープンスペースや連携パスの活用についても触れられている」など、どのような技能が含まれているかを見て評価できるという。堺和弘教頭は次のように話す。

「実技での思考力・判断力・表現力を評価するために、文章や図で可視化することを大切にしています。知と体を連動させる指導が技能の向上にもつながると考えています」

また、道徳の授業での見取りについて、主幹教諭の朝妻浩慶先生は次のように話す。

「授業で震災時に防災放送を続けた女性の判断を題材にした時、生徒に自身の考えや生き方と真剣に向き合い、悩む姿が見られました。女性の判断に賛成なら青印のコップ、反対なら赤印のコップを机に出して意思表示をさせました。何度もコップを入れ替える姿から、心の迷いが見て取れました。具体的な考えや心の変容は記述させないと分かりませんが、授業者だからこそ見える生徒の姿や手応えも見取りの1つとして大切にしています」

「文中式ノート検定」で思考のプロセスを整理

同校は、授業のノートも生徒の思考過程を知る素材として重視し、「文中式ノート検定」で評価している。これは、週ごとに教科を決め、全校集会時に教師全員で生徒全員のノートを見て、級を与えるというもの。授業で学んだ内容を自分の言葉でまとめ直す重要性を伝え、生徒に思考を整理するきっかけとしてもらうことがねらいだ。上の級を目指し、より真剣に授業に臨む生徒も増えているという。また、文中式ノート検定は、教師が他教科の授業内容を知る機会にもなるという。

「生徒が書いたノートは、授業内容を凝縮したものです。教科担任がどのように授業を構成し、指導しているのかは、生徒のノートを見ればよく分かります。教師が良い授業をして板書もきちんとすれば、生徒の学力は伸びます。そうした意識を教師に持ってもらうことも、ノート検定を行う理由です」（堺教頭）

「思考力・判断力・表現力」を評価し、育む

ルーブリックを使い評価を指導改善に生かす

同校では、研究授業評価指標（ルーブリック、図2）を活用し、生徒への評価と教師の授業力向上を一体化させた「授業改善システム」も行っている。流れは次の通りだ。

まず、研究授業用のルーブリックを作成し、教師を生徒役として模擬授業を行う。授業改善の視点や評価の工夫、発問や指示を吟味し、そこで得た知見を基に研究授業を実施する。その後に開く授業整理会では、「文字を使って説明できた生徒が8割以上」など、ルーブリックに記した基準に基づいて、本時のねらいを達成できたのか、教材は妥当だったか、評価の指標は適切かといった課題や問題点をまとめる。

授業を通して生徒が学力や表現力を高めたかどうかを確認すると共に、それが達成できたかどうかを他教師が客観的に見ることで、授業力の向上に結び付けようというわけだ。模擬授業や授業整理会は、毎週木曜の放課後に30分以内で行う。そのために「発言は代案を持って行う」「無駄に褒めない」といった会議のルール、またルーブリックで授業改善の視点を事前に焦点化しておくことを大切にしている。「学校が取り組むべき課題はたくさんあります。だからこそ会議の効率化を図るなど時間を捻出する努力が大切です」（佐々木校長）

また、教科の壁を超えて教師の足並みをそろえることが出来るのも、このシステムの利点だ。朝妻先生は次のように述べる。

「教科の区別なく、共通の視点で授業の改善点を出し合うことで、教師が同じベクトルで研究に取り組めることが、本システムの良いところです。共通の基準で授業を批評し合うことにより良い意味でのライバル心が生まれ、授業の質が飛躍的に向上したと思います」

今後もこうしたシステムを生かしながら、未来を切り開く力の育成という目標に向けて教職員全員で取り組んでいく。

「取り組む前から必ず効果が出ると確信を持って着手できる活動はありません。大切なのは、成果が見えない取り組みでも、決して手を抜かずに取り組むことです。教師一人ひとりが課題を見付けながら、より良いものに改善していく努力の積み重ねが、結果的に学校を変えていくのだと思います」（朝妻先生）

図2　理科のルーブリック（例）

本時の主眼
○高気圧と低気圧のつくりを理解し、気圧配置図を見てそのようすをつかむことができる。
○気圧配置図からその風の向きと強さを説明できる。

評価項目	4	3	2	1	評定	代案および評価の根拠
主眼の達成状況	ほとんどの生徒が高気圧と低気圧のつくりを理解し、その風の向きや強さを気圧配置から説明できる。	約 70%の生徒が高気圧と低気圧のつくりを理解し、その風の向きや強さを気圧配置から説明できる。	約半数の生徒が高気圧と低気圧のつくりを理解し、その風の向きや強さを気圧配置から説明できる。	ほとんどの生徒が高気圧と低気圧のつくりを理解できず、その風の向きや強さを気圧配置から説明できない。		
手だての有効性	作図による演習の活用によって、理解が深まり、科学的思考力が高まっている。	約 70%の生徒が作図による演習の活用によって、理解が深まり、科学的思考力が高まっている。	約半数の生徒が作図による演習の活用によって、理解が深まり、科学的思考力が高まっている。	作図による演習の活用による効果がほとんどない。		
指示・発問	発問・指示が適切でほとんどの生徒によく伝わっている。	ほぼ７０％の生徒にしか発問・指示が伝わっていない。	ほぼ半数の生徒にしか発問・指示が伝わっていない。	ほとんどの生徒に発問・指示が伝わっていない。		

２年生理科「前線と天気の変化」のルーブリック。＊同校の資料をそのまま掲載

校長として心掛けていること

改革を推進するには、まず学校の現状を否定することから入るのが重要だと考えます。それはつまり、課題を明確に認識しなければ、前へと進めないからです。ビジョンを打ち出し、それを教頭や主幹、研究主任にしっかり伝える。そして、何よりも大切なのは、全ての先生からアイデアを出してもらい、吸い上げることです。全教職員の創意工夫が生かされる学校づくりが、組織を活性化し、生徒を変える力になると考えます。

学校事例 2

ワークシートを工夫し思考力を多面的に評価する

埼玉県 宮代町立前原中学校

宮代町立前原中学校では、授業や実験でワークシートを活用しながら、生徒の思考力や表現力などの生きる力を評価している。考えたり、表現させる場面を多く設けることで、多面的な生徒把握が可能になると共に、毎回の授業のねらいが明確になり、ポイントを絞った授業が出来るようになった。

生徒にも見える多面的な評価が必要

埼玉県東部の南埼玉郡に位置する宮代町立前原中学校は、林や畑、民家に囲まれた静かな環境にあり、生徒は落ち着いて授業や朝の全校読書、ボランティア活動などに取り組んでいる。

そのような中、同校の小林尚（たかし）校長が感じる生徒の課題は、学んだ知識を活用して思考、表現をしていく力の不足だ。これらの力を確実に育てるには、指導の工夫と共に「何をもって育成したと言えるか」という評価の工夫も必要だとして、2008年度から3年間、国立教育政策研究所の「学力の把握に関する研究指定校事業」の指定を受け、理科・社会・外国語・美術の4教科で新しい評価方法の研究を行ってきた。研究を始めるに当たり、最も大きな課題だったのは評価に対する教師の意識を変えることだったと、小林校長は言う。

「指導の先生方に指摘されたのは、『先生方は、どう教えるかという指導は一生懸命に工夫されているが、どのように評価するかという観点からの指導改善が苦手』ということでした。評価といえば定期考査での得点を重視しがちでしたが、思考力や表現力を育んでいくためには日頃の授業から表現する場面を意識的に取り入れ、生徒に見える形で多面的に評価する必要があると考えました。そのために、評価方法の研究を通して、どのように先生方や生徒の意識を変えていくかが課題でした」

生徒・教師の双方向のやりとりで思考力と表現力を評価する

特に難しかったのは、「思考や判断を伴った表現を評価する」という考えの定着だ。評価の観点は意識していたものの、実際に評価するとなると、見取りにくい思考力や表現力

School Data

◎1983（昭和58）年開校。学校教育目標は「自主・敬愛」。2010年度国立教育政策研究所「学力の把握に関する研究指定校事業」指定校。学校歯科保健コンクールで最優秀校の受賞歴多数。

校長◎小林 尚先生

生徒数◎ 269人　学級数◎ 10学級（うち特別支援学級1）

所在地◎〒345-0815　埼玉県南埼玉郡宮代町字中461

TEL◎ 0480-34-0631

URL◎ http://www.town.miyashiro.saitama.jp/WWW/gakkou.nsf/07MAEHARA

公開研究会◎未定

「思考力・判断力・表現力」を評価し、育む

は「上手に文章が書ける」「発表の構成が優れている」といったスキル、また「積極的に発言する」といった回数などで評価しがちだった。そうした認識は生徒にも伝わり、「教えられた表現を使う」「声を大きくする」「発言を多くする」など表面的な行動を表現力として捉える傾向が見られたという。

そこで、まず行ったのは教師間での評価観の共有だ。従来の学習指導要領にある「技能・表現」の表現と、新課程で示された「思考・判断・表現」の表現の違いを明確に区別して評価、指導するように改めて確認した。

「例えば、理科の課題で、電流の配線図を描かせるだけでは従来の『技能・表現』に近い評価を行うことになりますが、電流の配線をつなぐ順番やその理由までを書かせれば、生徒の考える過程にまで踏み込んで評価できます。更に、『思考・判断』を伴う表現を評価する際は、表現を広く捉えようと話し合いました。生徒の中には、言葉よりも図や絵で表現することが得意な者もいます。表現方法に自由度を持たせ、生徒なりの考えやその過程を見取り、評価することも大切にしましょう。そのために、考えの過程を見取れるように課題を工夫しましょうと、教師間で確認しました」（小林校長）

生徒の思考力や判断力を丁寧に把握し、評価、指導改善を行うために同校が選んだのがワークシートの活用だ。

「自分の考えを相手に伝えるための基本的な表現方法を身に付けさせるだけで満足するのではなく、生徒一人ひとりの持つ個性を生かした考えや感じたことの表現をもっと評価すべきだと考えています。美術の先生は、生徒一人ひとりの作品を見ながらアドバイスをします。それと同じような姿勢を他教科でも取り入れたいと考えました。ワークシートであれば、生徒は『自分が書いた』という実感を得られる上、教師がコメントを書き加えることによって、生徒と教師の双方向のやりとりができ、生徒との共通理解を図りながら、その成果物を基に評価できます」（小林校長）

それでは、各教科でどのようにワークシートを工夫し、評価・指導改善に生かしているのか。社会と理科の取り組みを見ていく。

◎社会科での評価の工夫 知識を問う設問と思考させる設問を設定

社会科では、生徒が重要語句の暗記レベルにとどまり、社会的事象の特徴や関連まで理解できておらず、資料を正確に読み取り、活用しながら思考・表現する力が身に付いていないことに課題があった。そこで、地図やグラフなどの資料を活用し、読み取った情報を基に緯度・経度、時差などの基礎知識が身に付くワークシートの研究に取り組んだ。

ワークシートの特徴の1つは、調べれば答えを書ける記入課題と、考えなければ答えられない記述課題を意識的に設定したことだ。例えば、「経度・標準時・時差」に関するプリントでは、記入課題で日本が夜である時刻に朝である国はどこか、教科書や資料を見ながら時差に関する説明文の穴埋め問題に取り組ませ、記述課題で国語の『朝のリレー』（谷川俊太郎著）を教材に用いて（P.16図1）、詩に登場する都市を地図で調べさせた。「カムチャッカの若者がきりんの夢をみているとき、メキシコの娘は朝もやの中でバスを待っている」という詩を引用し、その時の日本の

宮代町立前原中学校校長
小林 尚 こばやし・たかし
「『長所を伸ばす』を合言葉に教職員全員で『自主・敬愛』の精神あふれる生徒を育てる」

宮代町立前原中学校
八木橋孝雄 やぎはし・たかお
教務主任、理科担当。「今、何をなすべきかを考え、主体的に生き抜くことのできる人間を育てる」

宮代町立前原中学校
橋本 淳 はしもと・あつし
生徒指導主任、社会科担当。「自分の長所に気付かせ、伸ばし、社会に貢献できる生徒を育てたい」

宮代町立前原中学校
安藤雅彦 あんどう・まさひこ
研修主任、理科主任。「一人ひとりの長所を伸ばし、自らの力で将来を切り開いていく生徒を育てる」

＊プロフィールは取材時（2012年3月）のものです

図1　社会のワークシートの工夫（例）

（プリントではここに『朝のリレー』の本文が入る）

詩の中にある地名・都市名を地図帳で調べてみよう。
（どうすればいいか？わかりますよね！）

時間帯は？	東経それとも西経？
カムチャッカ・・・	
メキシコ　・・・	
時間帯は？	
ニューヨーク・・・	
ローマ　・・・	

ニューヨークが夜の時、ローマは（　　）である。
カムチャッカが（　　）の時、メキシコは（　　）である。
◎それぞれの場所にふさわしいあいさつは何だろう？
（　　）（　　）（　　）（　　）

なぜ、このような事が起きているのだろう・・・それは　　があるから！

＊同校の資料を基に編集部で作成

時刻を考えさせることで、日本と各都市の時差を考えさせたり、その時にふさわしいあいさつや、もし世界中が同じ時刻で生活したらどのような不便が生じるかについて考えさせた。このように、生徒に身に付けさせたい力に応じて記入課題と記述課題を区別した。

思考力を評価する課題で生徒の力を多面的に把握

2つめの特徴は、生徒自身が手を動かして解く場面を増やしたことだ。本初子午線と赤道を中心に記した地図の台紙に、切り抜いた大陸を貼るという課題もその1つ。社会科担当の橋本淳先生は、そのねらいをこう話す。

「多くの生徒が中央部に日本、東側にアメリカ大陸を貼り、学力上位層の中にも間違えている生徒がいました。生徒がいつも見るものとは異なる地図を使うことで、多角的なものの見方や思考力、表現力を養うことを目的としました。貼り直しをさせる際には、歴史で学んだ『極東』といった言葉を引き出しながら、他国と日本の関係を考え、表現させることで、知識中心の定期考査だけでは分からない、思考の過程を把握できるようになりました」

ワークシートにより授業のねらいが明確になり、知識の理解・定着が進めやすくなったことも成果の1つだと、橋本先生は話す。

「ワークシートの活用により、授業の一つひとつで最低限、理解させたいポイントがより明確になりました。机間指導をしながら、出来ていない生徒を確認していけば、定期考査の前に理解度をチェックできます。個別指導や小テストなど早めの対策が可能になるので、知識をより定着させやすくなりました」

◎理科での評価の工夫
生徒が自分の視点で考え表現するワークシートへ

理科では、観察・実験から得られた変化や規則性を単に知識として理解するだけでなく、規則性を自分の言葉で表現し、活用する力を身に付けることをねらいとしている。

そこで、従来から重視してきた観察・実験のワークシートを改善し、観察・実験の技能に加え、思考・判断を伴う表現力の把握をより評価しやすいものにした。最も留意したのは、生徒が考え、判断した結果を表現できる内容を増やすことだ。教務主任の八木橋孝雄先生は次のように説明する。

「それまでのワークシートの内容は実験の手順を示すことが中心で、実験のどこに着目し、結果をどのように表現したらよいのかを示していました。教師が意図する通りに生徒を正解へと導くための教材になっていたのです。結果、生徒にとっては書きやすいワークシートとなっていましたが、どの生徒も同じ解答となり、生徒の気付きや思考の過程を評価するものにはなっていませんでした」

生徒の知識と技能に大きな差があることも課題だった。電圧計の回路へのつなぎ方を質問されて「並列です」と答えられたとしても、実際に電圧計に豆電球をつなげさせようとするとつなぎ方やその順序が分からない生徒が大半だった。知識はあるものの、実際に手を動かし、頭を働かせて理解していないため、生きた知識として身に付いていなかったのである。

そこで、生徒が自分の視点で実験・観察し、その結果を表現できるようにワークシートを工夫した。例えば、第1分野の酸化銅の実験では、実験結果の考察の際、以前は「石灰水はどうなったのか」「試験官の中の物質はどうなったのか」というように、誘導的に正解

「思考力・判断力・表現力」を評価し、育む

図2　理科のワークシートの工夫（例）

●改善前

2　実験結果
（変化や気づいたことなどをまとめる。）
①石灰水はどうなりましたか。
※なぜそのようになったのですか。
②試験管の中の物質はどうなりましたか。
③試験管の中の物質は何だと思うか。
3　考察（この実験から何がわかったか。）

●改善後

2　実験結果
（気づいたことを記録しよう。）

3　考察
（実験結果を振り返ってみよう。）
①試験管の中の物質は何だと思うか。
②なぜ，そう判断するのですか。
③この実験から，どのようなことが言えるのか。

以前のワークシートは、何を書けばよいのか誘導するような設問だった。それを、生徒に何を書けばよいのかを考えさせる設問とした
＊同校の資料を編集部が一部加工して掲載

へ導いていく設問にしていた。工夫後は、最初にガスバーナーと試験管の図版を挿入し、何がどのように変化したのか、まず生徒が気付いたことから考えさせるようにした（図2）。その結果、事前の知識の量にかかわらず、生徒は気付きを記入できるようになった。

考えて表現する大切さを生徒自身も実感するように

理科のワークシートのもう1つの工夫は、実験の評価を「知的な技能」「操作的な技能」「表現能力」に分けて課題を設定した点だ。

「電流とその利用」では、まず豆電球と電圧計、電源のイラストを見せ、正しい配線を考えさせ、その上で実験を行い、電流の値について考察した結果を記入させた。どのような順番で配線をしたのかは「操作的な技能」、なぜその順番でつなぐのかを考える部分は「知的な技能」、線でつないだり文章で書かせたりする部分は「表現能力」となる。

「観点を整理することで、生徒の力を評価しやすくなるだけでなく、この日は操作、この日は知識というように、身に付けさせたい内容に焦点を絞って授業を進めるようになりました」（八木橋先生）

ワークシートの工夫により、評価に対する生徒の意識も変わりつつあると、理科主任の安藤雅彦先生は指摘する。

「学期末に評定を付ける際、最近は定期考査の結果よりもワークシートでの評価の比重を大きくしています。そうすることで、生徒も日常の授業や実験の中で自ら考え表現することの大切さを意識するようになりました」

生徒一人ひとりの観察技能や表現方法、授業の理解度がより把握しやすくなったのも大きな成果だ。ノートは生徒によって表現内容が異なるため、共通した内容について理解度を見取るのは容易ではないが、ワークシートは質問内容が共通しているので、生徒の理解度や表現力の違いが浮き彫りになるという。

「最初は書くのを嫌がる生徒もいましたが、理解が深まると考えることが楽しくなったようで、今では意欲的に取り組んでいます。なぜそうなるのかと突き詰めて考えさせることで、生徒の理科に対する関心が高まるのだと改めて感じています」（八木橋先生）

今後の課題は、ワークシートによる評価の方法論を、研究指定外の教科に広げることだ。また、学校内だけでなく、研究指定校として他校にも成果を発信していくという。

ワークシートが形骸化しないようにすることも課題だ。形が整い、運用も慣れるにつれて、教師が新鮮な気持ちで取り組むのは難しくなる。教師が異動で入れ替わり、生徒の気質や学力も変わるので、その都度、生徒の実態に即して改良を重ねていくつもりだ。

校長として心掛けていること

評価をすること自体が、教師の役目ではありません。指導を単なる教師の自己満足で終わらせないために、指導の結果としての学力の定着度合いをきちんと見取るための評価なのだと思います。

指導の結果、生徒の学力は上がったのか、生徒の目は輝いてきたのか。目に見える結果を出すことが、地域や保護者、子どもに対する我々の使命であるという思いを強く持って、指導改善を重ねていきたいと思います。

学校事例 3

教科内外に発表の場を設け生徒の考える過程を見取る

新潟県 長岡市立東中学校

長岡市立東中学校は、教科内外の活動を通して、定期考査だけでは評価しにくい思考力、判断力、表現力の育成に力を入れている。教科指導での口述試験やペア活動、教科外指導での「教科の広場」や行事などの活動が生徒の思考力、判断力、表現力を育む場となっている。

数値に表れにくい思考力、判断力、表現力こそ、学校で育てたい

長岡市立東中学校は、長岡市の市街地を学区に持つ中規模校だ。2009年に校舎を改築する際には教科教室型を採用し、授業は学級に固定の教室ではなく、教科の特性に合わせて作られた専用教室と、これに併設されたメディアスペース（教科の広場）に生徒が移動して行われている。

地域の教育熱は高く、保護者の学校に対する期待は大きい。同校は「授業がわかる生徒80％以上」「学校が楽しいと感じる生徒85％」など、学習から生活全般に至るさまざまな取り組みについて数値目標を掲げ、年2回実施する授業理解度意識調査、基礎力テスト、各種アンケートで成果を測り、保護者や地域に公表している。

生徒の学力や学習意欲は総じて高く、教科学力は全国や県の平均を上回る。しかし、そのような結果だけでは満足できないと、佐藤忠弘校長は述べる。

「文部科学省の全国学力・学習状況調査や全国標準学力検査で測れる学力は、基礎・基本だと思います。本校の生徒は、テストの得点は良いのですが、学んだ知識や技能を状況に応じて活用する力、自分なりの考えや主張を根拠に基づいて表現できる力などはまだまだ不足していると感じます。このような数値に表れにくい力こそ、学校でしっかり育てていきたいと考えました。新学習指導要領でも表現力が重視されていますが、これまでの指導要領で示されていた『技能・表現』の表現とは求められている内容が大きく異なります。私たちは、その場の人間関係や状況に応じて知識を活用する力、思考・判断したものを表現する力こそ、これからの時代に求められる力だと捉えて指導しています」

同校は、この「状況に応じて自分で考え、

School Data

◎1934（昭和9）年開校。教育目標は「考える東中　いたわる東中　やりとげる東中」。3年前に改築された校舎は教科教室型で、各教科の特性に応じた教育を展開する。キャリア教育、環境教育にも力を入れる。

校長◎佐藤忠弘先生

生徒数◎ 448人　学級数◎ 12学級（うち特別支援学級1）

所在地◎〒940-0093　新潟県長岡市水道町5-1-1

TEL◎ 0258-32-2131

URL◎ http://www.kome100.ne.jp/higashi-jhs/

公開研究会◎未定

「思考力・判断力・表現力」を評価し、育む

判断し、行動していく力」の育成を課題として、思考力、判断力、表現力を伸ばすための教科指導の充実を図ってきた。その中で特に大切にしているのは、それらの力を適切に見取り、指導改善に結び付けるための評価だ。生徒に本当に力が付いたのかを丁寧に見取ることが、更なる授業改善につながると考えるからだ。

では、どのような指導を通して、生徒が自ら考え判断した表現力を見取っているのだろうか。教科の授業と教科外の活動に分けて見ていく。

◎教科指導での取り組み 口述試験やペア活動で思考の過程を可視化

数学科担当の貝塚敦先生は、理解に至るまでの過程を自分の言葉で説明できる力を付けさせたいという思いから、授業にペアで説明し合う活動を積極的に取り入れ、学期に1回は口述試験を行っている。

例えば、方程式「$3x-4=x+2$」の移項なども含めた解答の過程を、全て言葉で説明させる。解答をノートに書かせると、生徒は容易に「$x=3$」と解答し、この式が「方程式」であり、解くために「移項」することも知っている。しかし、口述させると、多くの生徒が言葉に詰まり、成績の良い生徒でもうまく説明できないことが多いと、貝塚先生は話す。

「多くの生徒は、問題を形式的に捉えているだけで理屈が分かっていないため、言葉で説明できません。基本的な原理を自分の言葉で他人に説明できるところまで理解してはじめて、使える知識として定着したと言えるのです。例えば、『移項』という作業を『左辺と右辺が常に成り立つように、両辺に同じものを加減乗除した結果、移動したように見えている』と理解して処理しているのか、『方程式では符号を変えて反対の辺に移動させる』と機械的に処理しているのかでは、理解までの思考の過程や定着度は大きく異なるでしょう。口述は時間が掛かるため、頻繁に出来るものではありませんが、そもそもの理屈が分かっていないのか、理屈は分かっているけれども計算力がないのか、生徒一人ひとりの課題が浮き彫りになります。定期考査では見取りにくい、表現に至るまでの思考や判断の過程を評価するには、口述試験やペアで説明し合う活動は有効だと考えています」

技術科担当の髙橋清先生は、プレゼンテーション技能の向上と併せて自ら考える力を育みたいと考え、地元・長岡産の野菜をアピールするプレゼンテーション資料を2回作る課題を出した。

1回目は、基本的なプレゼンテーション技能の習得に主眼を置き、生徒に自由に資料を作らせた。出来た資料は生徒同士で見せ合い、改善点を互いに指摘させ、自分に不足している表現技術を学ばせた。

そして、2回目はプレゼンテーションの対象を「野菜嫌いな人」と設定し、対象に合わせて資料を作り直すことを課題とした。生徒は1回目に指摘された改善点を踏まえつつ、対象に合った追求の仕方や素材は何かを考えながら再度資料を作成した。

「野菜が嫌いな人向けなので、野菜が良い印象を与えるようにアニメーションを入れた方がよい」「言葉遣いを平易にした方が、親しみが湧きやすい」など、1回目の資料には無かったアイデアや工夫が見られた。また、資料にナレーションを付けるように指導したところ、録音した自分の声が思った以上に聞き取りにくいことに気付き、どうすれば相手に分かりやすく伝えられるかを考える生徒も

長岡市立東中学校校長
佐藤忠弘 さとう・ただひろ
「生徒を愛情深く育て、智慧を持ち、周りから信頼され、社会に貢献できる人に育てたい」

長岡市立東中学校
髙橋清 たかはし・きよし
研究主任、技術科担当。「生徒にとって最大の教育環境は教師。自身の成長が生徒の成長になると思い精進したい」

長岡市立東中学校
貝塚敦 かいづか・あつし
数学科担当。「生徒といつも喜怒哀楽を共有し、そして共感、共汗していきたい」

＊プロフィールは取材時（2012年3月）のものです

いたという。

「育てたい力に応じて課題を分けて設定し、出来上がった2つの資料を比較することによって、生徒が課題をどう思考、判断し、表現を工夫したのかがより見取りやすくなりました。プレゼンテーションはあくまで表現方法の1つに過ぎません。それを通して、誰に何を発信するのか。その思考力・判断力を育みたいと考えました。基本的なプレゼンテーション技能だけでなく、対象に合わせて思考を働かせ、表現を工夫できたのか、その過程を評定値にも反映しています」と、髙橋先生は話す。

「深く勉強すればするほど、正解のない問題がたくさんあると分かります。大切なのは、正解を出すことではなく、自分で考えたり調べたりする過程だと考え、それを可視化できるような課題を出すようにしています」（佐藤校長）

防災教育を体系化し状況に応じた行動力を育てたい

今後の課題は、教科間の連携を深め、表現力や思考力を育てていくことだ。中でも「防災教育」は力を入れたい分野だ。保健体育ではけが人の応急措置など、理科では地層やプレートの仕組み、地震のメカニズムなどを指導しており、更に、学校全体で防災訓練を年3回行っている。この別々に行っている教育活動や行事を、今後は防災教育という視点で体系化・組織化していきたいと、佐藤校長は話す。

「2004年の新潟県中越地震では、県内で大きな被害が出ました。けが人が学校に運ばれた時の対処法、避難所となった時の配給食糧の活用など、身近に起こりうる状況に合わせて知識や技能を学ぶことで瞬時に思考、判断し行動できる力や、外部に発信する力を養うことが出来ると考えています」

◎教科外指導での取り組み①「教科の広場」での発信を通じて相手に応じた表現を考える

思考力や表現力を鍛えるには、他者からの評価が有効な材料となる。そこで、同校は教科教室に隣接している「教科の広場」（写真）を発信の場として活用している。ここは、該当教科の資料や学習教材などを展示するスペースであり、生徒会の委員会活動とは別に、公募制による「教科の広場運営委員会」が企画・運営を行う。委員会は1教科20人程度を上限とした1～3年生の混成であり、その教科が得意な生徒だけでなく、苦手な生徒も応募し委員となっている。

主な活動は、教科教室や教科の広場での教材の展示、教科イベントの企画運営、定期考査に向けた対策問題の作成などだ。これまで教科の広場の展示は、その教科が得意な生徒が興味のあるものを研究し、制作物を発表する場になりやすく、教科委員以外の生徒の目を引くものになりにくいという課題があった。そこで、教科委員以外の生徒にも興味を持ってもらえるようにするにはどうすればよいかを考えながら展示の企画をするようにとアドバイスをしている。

「その教科が苦手であったり、興味がない生徒にどのように興味を持ってもらうかを考えることは、相手を意識した発表力を身に付ける上でよい機会になります」（佐藤校長）

同校は教科教室型の校舎で授業を行うこと

写真　英語の「教科の広場」。廊下からパーテーションで仕切られただけの開放的なつくりになっており、生徒が気軽に勉強や会話が出来るスペースも設けられている

「思考力・判断力・表現力」を評価し、育む

から、日頃から学校見学に来る人が多い。そうした機会も、生徒の表現力を鍛える場として活用している。

「初めて本校に来る大人に対して、どのように発表すれば教科委員の取り組みを理解してもらえるのか。大人に対して説明する場合は、発表の仕方や言葉遣いも変える必要があります。それらを考慮してどのように表現すればよいのかと、適切な表現を考えることが思考力、判断力を鍛えることにもつながると考えています。最近は、来校者から予想外の質問が出ても、自分なりに内容を理解して、自分の言葉で説明できる生徒が少しずつ増えてきました」（佐藤校長）

このような発表や質疑応答の場は、生徒が力を高める場であると共に、教師が生徒の思考力や表現力を見取る良い機会にもなっている。

また、教科の広場は、先輩やクラスメートの考え方、学習法などを学ぶ場でもある。どの教科も「先輩から学ぶ」をテーマに展示物に工夫を凝らし、理科では単元末に生徒が学習内容のまとめや振り返りを記入する「伸びよカード」を掲示。数学では、学習内容を丁寧に整理してある先輩のノートを展示して、優秀な先輩の思考過程が分かるようにした。「友だちの作品が参考になる」「興味を持って授業に臨めるようになった」といった感想が聞かれ、広場に集う生徒の思考力や表現力、学習意欲にも好影響を及ぼしている様子がうかがえる。

◎教科外指導での取り組み②
原稿を見ずに読み上げ 発表力・表現力を鍛える

教科の広場と同様に、発表力を鍛える重要な場は行事での発表だ。同校では、全校生徒の前で行う演説や発表は手元の原稿を読まずに「語る」ことが原則になっている。大勢に見られる＝評価されるという意識が、発表力を鍛えている。教師がそう指示したわけではなく、先輩の姿から代々受け継がれてきた東中生の誇りであるという。

始業式で学年代表が述べる決意表明、卒業式の送辞・答辞、学外からの見学者もいる発表会など、どの発表の場でも必ず目の前の相手を見ながら語る。1年生では丸暗記をする生徒もいるが、2・3年生になると原稿に目を落とすとしても、話の流れを確認する程度だ。途中で頭が真っ白になってつかえる生徒もいるが、それをとがめる教師や生徒はいないという。

また、複数の人々が繰り広げる議論の場では、自分の主張を的確に述べることも重要になる。

「子どもたちが出ていく社会には、自分への敵意を隠さない人、あえて意地悪な質問をする人がいるかもしれません。そういう人たちとのコミュニケーションでは、相手の気持ちを害することなく、いかに自分の思いを伝えていくかが重要です。人間関係の中で磨かれる思考力や表現力こそ、確かな学力の土台になると考えています」（佐藤校長）

今後の課題は教師のベクトルをそろえていくことであると、髙橋先生は強調する。

「思考力や判断力を鍛えなければならないという意識は、先生方で共有できており、各授業でそれぞれの先生が工夫をしていますが、学校全体としてどのように育てていくかについては、教科間の更なる歩み寄りが必要です。教科教室型校舎のメリットや教科の個性を生かしながら、教科間の連携を更に深め、表現や発表の場の工夫をして、評価をしていきたいと思います」

校長として心掛けていること

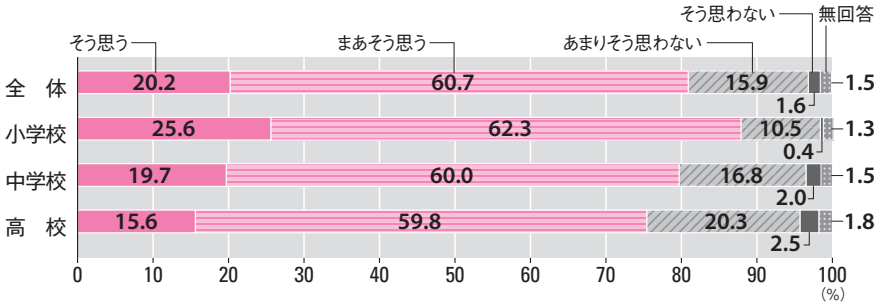
「子どもたちの最大の教育環境は、私たち教師である」。このことを自覚して、日々教材研究、教材開発に取り組むことを大切にしています。本校の課題である活用力、表現力を高めていくために「何でも挑戦・進んで実践・みんなに発信」を合言葉に、これからも生徒が主体的に教科運営に参画するような学校体制を工夫し、その成果を内外に公開することで評価を得ながら、更なる授業改善に取り組んでいきたいと思います。

「思考力・判断力・表現力」の評価と指導の実態

新課程では、「生きる力」の育成として「知識・技能の習得」「思考力・判断力・表現力の育成」などが目指されている。思考力、判断力のような「見取りにくい」力を学校現場ではどのように指導、評価しているのだろうか。教師の評価に対する意識とその評価の実態を見てみよう。

1 「一人ひとりの状況に目を向けるようになる」と8割の中学校教師が回答

Q. 目標に準拠した評価（いわゆる絶対評価）や観点別学習状況の評価によって、児童生徒一人ひとりの状況に目を向けるようになると思いますか

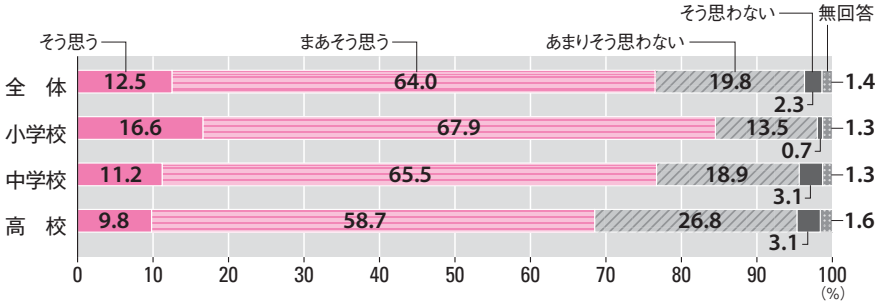


注1）サンプル数は、全体4,978人、小学校1,659人、中学校1,628人、高校1,691人
出典／文部科学省「学習指導と学習評価に対する意識調査」（平成22年）

絶対評価や観点別評価の実践により「一人ひとりの状況に目を向けるようになる」と、肯定的な回答をした教師は全体で８割。学校段階別に見ると、小学校で最も高く（87.9%）、中学校（79.7%）、高校（75.4%）と学校段階が進むにつれてポイントが減少しているが、全体的には絶対評価や観点別評価の導入について肯定的な態度がうかがえる。

2 授業目標の明確化や多角的な学力の育成につながると感じている中学校教師は7割以上

Q. 目標に準拠した評価（いわゆる絶対評価）や観点別学習状況の評価によって、授業の目標が明確になり、学力などを多角的に育成することができると思いますか



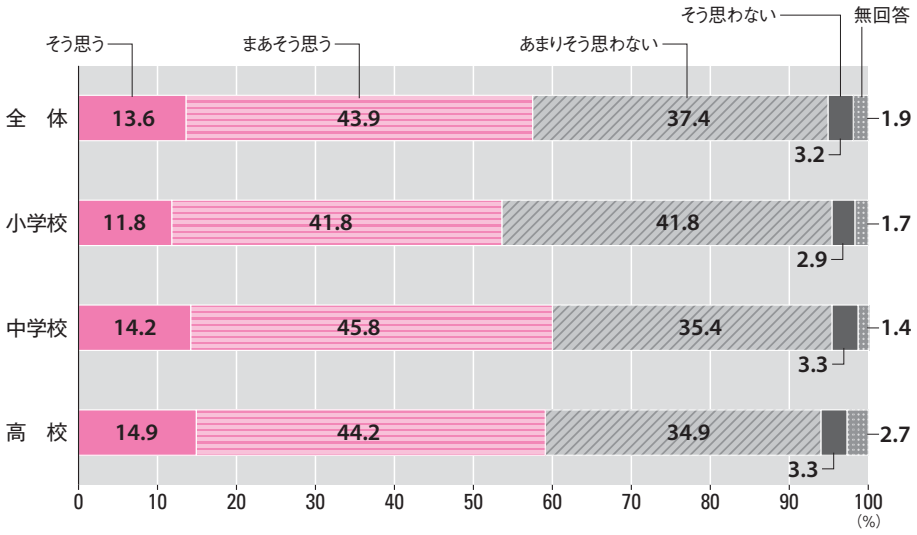
注1）サンプル数は、全体4,978人、小学校1,659人、中学校1,628人、高校1,691人
出典／文部科学省「学習指導と学習評価に対する意識調査」（平成 22 年）

絶対評価や観点別評価の実践により「授業の目標が明確になり、学力などを多角的に育成することができる」と回答した教師は、全体で76.5%。学校段階別に見ると、小学校が84.5%であるのに対し、中学校では76.7%、高校では68.5%となっている。背景として、中学、高校と上がるにつれて、相対的な学力の把握や評価の重要性が高くなることが影響しているのかもしれない。

「思考力・判断力・表現力」を評価し、育む

3 教職員間の共通理解を図ることに苦労

Q. 目標に準拠した評価（いわゆる絶対評価）や観点別学習状況の評価について、「評価規準や評価結果の妥当性について担当する教科や学級が異なる教職員の間で共通理解を図ることに苦労する」と感じますか

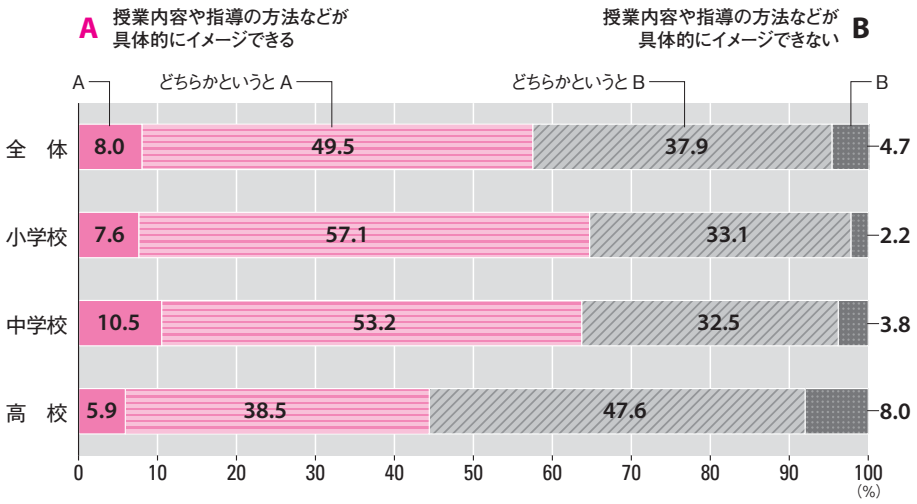


注1）サンプル数は、全体4,978人、小学校1,659人、中学校1,628人、高校1,691人
出典／文部科学省「学習指導と学習評価に対する意識調査」（平成 22 年）

絶対評価や観点別評価の実践により「評価規準や評価結果の妥当性について担当する教科や学級が異なる教職員の間で共通理解を図ることに苦労する」と回答した教師は、全体で57.5%。学校段階別に見たところ、小学校が53.6%とやや低く、中学校（60.0%）、高校（59.1%）は共に6割となっている。中学校や高校では、教科の専門性による壁などから教職員間の共通理解の構築に、より苦労する様子がうかがえる。

4 思考力、判断力、表現力を育む授業や指導方法が具体的にイメージできる中学校教師は6割

Q. 新課程で示されている、思考力、判断力、表現力を育むための「知識及び技能の活用を図る学習活動」や「言語活動」について、AとBのうち、どちらが実際に行っている指導や実感に近いですか



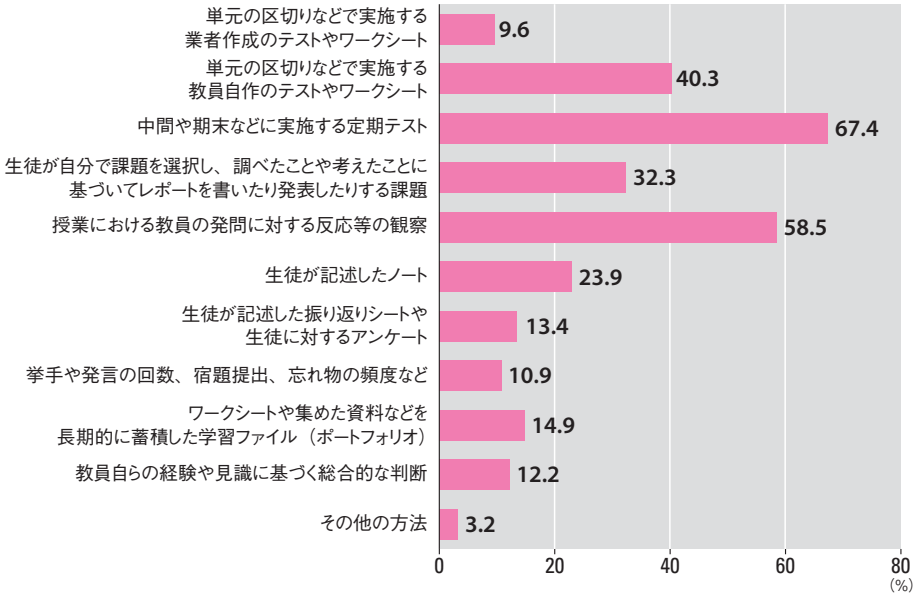
注1）サンプル数は、全体 4,978 人、小学校 1,659 人、中学校 1,628 人、高校 1,691 人
出典／文部科学省「学習指導と学習評価に対する意識調査」（平成22年）

思考力、判断力、表現力を育むための授業内容や指導の方法について具体的にイメージできるかどうかを尋ねたところ、小・中学校では約65%、高校では44.4%の教師がイメージできると回答した。

「具体的」のイメージが教師によって異なる可能性や、思考や判断の主体が生徒側にあることを考えると教師の回答だけで単純に比較することはできないが、少なくとも、教師がイメージする思考力、判断力、表現力を育むための授業内容や指導の方法には、かなりばらつきがあることがうかがえる。

5 思考力、判断力、表現力などの評価は「定期テスト」が約7割、「発問に対する反応等の観察」が約6割

Q. 生徒の思考力、判断力、表現力等の評価方法（回答：中学校教師）

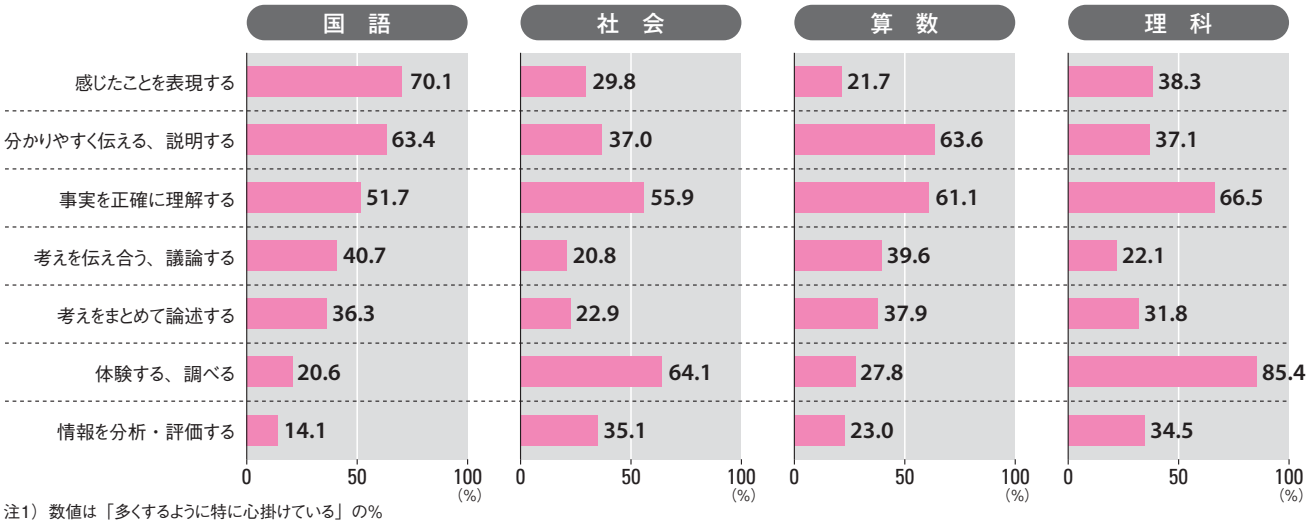


注1）当てはまるものを3つまで選択
出典／文部科学省「学習指導と学習評価に対する意識調査」（平成 22 年）

思考力、判断力、表現力等の評価方法を尋ねた調査結果を見ると、「中間や期末などに実施する定期テスト」と回答した教師が約７割、「授業における教員の発問に対する反応等の観察」と回答した教師が約６割、「単元の区切りなどで実施する教員自作のテストやワークシート」と回答した教師が約４割であった。教師は定期考査や小テスト、ワークシートなどを活用した記述物や授業中の発問の反応から思考力、判断力、表現力等の評価を主に行っていることが分かる。

6 どの教科も「考えを伝え合う」「考えをまとめて論述する」授業を心掛けている

Q. 2011年度の各教科の授業について、次のことはどれくらい当てはまりますか（回答：小学校教師）



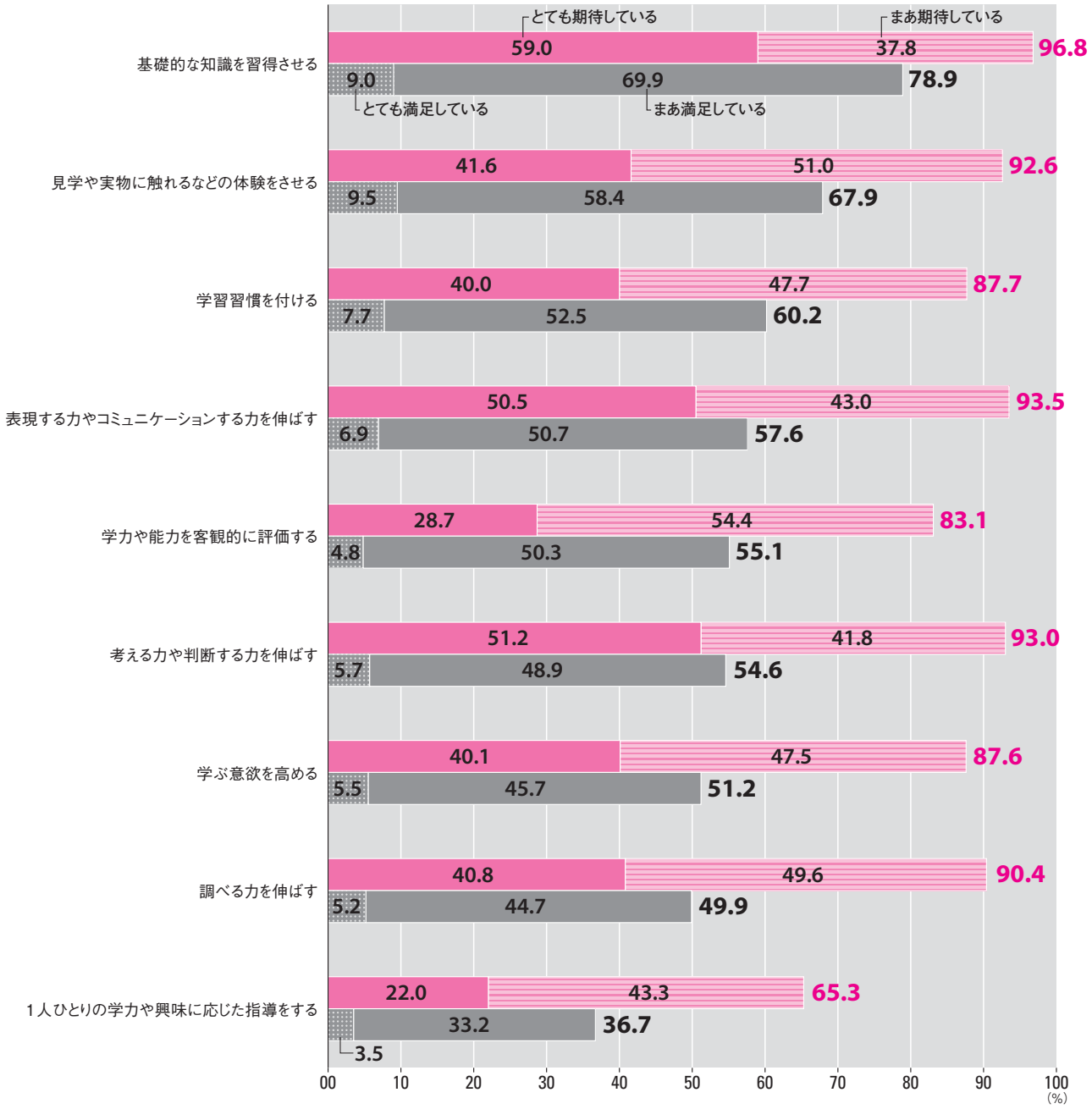
注1）数値は「多くするように特に心掛けている」の%
出典／ Benesse教育研究開発センター「小学校　新教育課程に関する調査」（2011）

2011年度に新課程が全面実施となった小学校の学習指導の状況に関する調査結果を見ると、思考力、判断力、表現力の育成にかかわる「事実を正確に理解する」「考えを伝え合う、議論する」「考えをまとめて論述する」といった心掛けは、教科にかかわらず見られることが分かる。

「思考力・判断力・表現力」を評価し、育む

7 「考える力や判断する力を伸ばす」指導に対する小学生の保護者の期待は9割を超える一方、満足度は6割を切る

Q. お子さまが通われている小学校にどのような教育や指導などを期待していますか。2011年度1学期の学校の教育や指導などにどれくらい満足していますか（回答：小学生保護者）



出典／Benesse教育研究開発センター「小学校　新教育課程に関する調査」（2011）

基礎的な知識の習得や体験をさせる指導についての保護者の満足度は高い。その一方で、考える力や判断する力、調べる力などへの満足度は6割を切っている。小学校の調査結果に見られるように、中学校でも考える力や判断する力、調べる力などの指導が保護者から期待される可能性がある。

ミドルリーダーの挑戦
―前へ！前へ!!

研究主任というチャンスを生かし学校全体、そして自身の授業力向上を図る

岡山県岡山市立福南中学校 **横林慎也** 32歳

Middle Leader

よこばやし・しんや◎教職歴９年目。岡山東支援学校に勤務後、同校に異動。赴任して６年目。担当教科は数学。モットーは「汝何の為に其処に在り哉」

これまで私が歩いてきた道のり

自分を高めるチャンスとして大役にチャレンジ！

２０１１年度から本校の研究主任を務めています。31歳で学校全体に影響を与えるような責任ある仕事を任せていただいたわけですから、プレッシャーがなかったと言えばウソになります。ただ、日頃から授業研究に関心を持っていた私は、「他校の先生とも意見交換できるなんてとても恵まれていることだ」「きっと先輩方が支えてくださるから大丈夫」と自分に言い聞かせ、研究主任という大役を教科指導力を向上させるチャンスと考えたのです。

私の初任校は特別支援学校でしたので、一般中学校での勤務は本校が初めてでした。赴任当初は、教科書のポイントを解説することばかり重視していました。授業中、生徒は落ち着いてはいたものの反応は少なく、私の解説ばかりが多くなり、雰囲気は次第に重苦しくなっていました。このままではいけないと他校の研究発表などにも積極的に参加する中で、「生徒の反応を生かしながら進める授業にしたい」と考えるようになっていたのです。

赴任３年目から実践しているノート指導も、生徒の言葉、反応を引き出す指導の１つです。中学校の勉強は板書を写せば終わりではありません。自分の頭で考え、自分の言葉で学んだ内容をまとめ直す力は、高校や大学での学びでも必ず必要になります。ノート指導を通して、学びの土台を中学生のうちにしっかりと築かせたいと考えました。（P・27参照）

このように、指導力向上を模索していた私に、研究主任をやってみないかと声が掛かったわけです。管理職や先輩の先生方が、私の授業改善に対する思いを感じ取って、この立場を与えてくださったのだろうと思うと、とてもうれしかったです。

日々の授業改善につながるよう研究テーマを焦点化

研究主任になって重視したのは、研究テーマを出来るだけ焦点化し、具体的な授業改善に結び付けることです。研究テーマが漠然としていると、何のために研究授業を行ったのかが分かりにくく、研究後の成果の見取りもあいまいになります。協力してくださった先生方に「大変だった」「やっと終わった」という思いしか残らないような研究にはしたく

ない。その思いからテーマの絞り込みにはかなりこだわりました。

11年度の研究テーマは「きく力をつける授業」としました。今の中学生はコミュニケーション力に課題があると言われています。本校では、「きく力」を「教師の指示や説明を集中してきく力（聴く力）」「他の生徒の考えに対して質問をしたり、共有したりする力（訊く力）」と捉えました。そして、「きく」に焦点を絞って生徒のコミュニケーション力を伸ばしていこうと考えたのです。

授業における聴く力とは何か。先生方と議論を重ねました。「グループワークでは、相手の話をどういうふうに聴けばよいのか」など、普段の授業を振り返りながら、「きく力」を養う授業や指導がどのようなものかを話し合いました。

研究協議を円滑に進めるためにワークショップの技術も学びましたが、「これは生徒とのコミュニケーションでも使える」などと気が付くこともあり、研究を通して得たさまざまな知識が自分の中で広がったのを感じています。

テーマを絞り込んで研究を進めることに対して、周囲の先生方には異論もあったかもしれません。でも、「横林先生がやってみたいのなら」と快く受け入れてくださいました。私の考えがまとまらず、資料の配布が遅くなったこともありましたが、それでも変わらず協力してくださいました。本当にありがたいことです。

今、私が踏み出そうとしている新たな一歩

当たり前のことを一歩引いて見直す風土を確実に引き継ぎたい

今、興味のあるテーマの1つは「学び合い」です。グループワークは既に多くの授業で取り入れていますが、本当の学び合いになっているのか、そもそも学び合いとは何かを先生方と考えてみたいと思います。

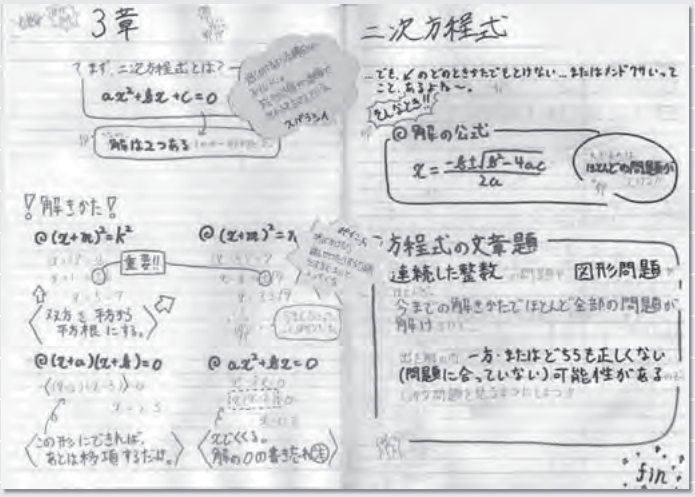
このように、既に当たり前に取り組んでいることも一歩引いて見直す気風が、中学校における「研究風土」であり、それが根付いていることが本校の強みだと感じます。

研究は継続してこそ価値がありますから、私の次に研究主任を務める先生にも、今の風土を確実に引く継ぐことが大切です。学校現場では、研究指定の終了や教師の異動のタイミングで成果がリセットされてしまうことがあるので、研究や異動の切れ目が指導の切れ目とならないように、学校に成果が蓄積していくシステムも確立していきたいと考えています。それが出来れば、本校の生徒たちの学びはこれからもますます豊かなものになるはずです。

これからも先生方との語り合いを通して学び、更に自分自身の授業を改善しようとする姿勢を見ていただく。それが、若くして研究主任という大役をいただいた私の役割なのだと思います。

横林先生の取り組み　学び方を伝えるノート指導

◎私の授業では、各単元の最後に２ページを使って「まとめのページ」をつくらせます。それぞれの生徒が、自分の言葉で間違えやすいポイントを整理、説明するのです。上手にまとめられたノートには、どのような整理の仕方、まとめ方が良かったのかのコメントを添えて、見本として教室に掲示します。



「話しかけるような口調の文章でまとめると、読む人が理解しやすいね」など、理解した内容を他者に発信するという観点からも生徒のノートにアドバイスを加えている。

＊プロフィールは取材時（2012年3月）のものです

特別企画

キャリア教育実践のヒント

キャリア教育に取り組む上で効果的な外部との連携とは？

地域や企業などの力を活用しながらキャリア教育に取り組む学校は多い。学校外との連携の必要性や実践のヒントについて、国立教育政策研究所の藤田晃之先生へのインタビューと、横浜市立山内中学校の実践から考える。

インタビュー

職業体験を通して生徒の価値観を揺さぶる

国立教育政策研究所　生徒指導・進路指導研究センター総括研究官　藤田晃之

学校外とつながってこそ生徒の職業観を相対化できる

中学校のキャリア教育の役割は、職業に対する生徒の価値観を豊かにし、生き方や進路に関する現実的探索をすることだと、私は考えています。約7割の中学生は普通科高校に進学し、社会に出るまでに時間がありますから、全員が中学校段階で特定の職業を選ぶ必要はありません。大切なのは、生徒が社会や職業に対する自分の理解の浅さに気付き、大人に学ぼうという気持ちになることです。

中学生は中学生なりに職業観を持っていますが、それは、一部の職業だけを対象にしていたり思い込みが含まれていたりします。その価値観が揺さぶられることで、自分の視野の狭さを実感し、高校以降、具体的に職業を考えていくための素地が出来るのです。

そのための鍵は、産業界などとの連携が握っています。保護者や教師以外の大人とかかわり、家庭や学校とは異なる世界を肌で感じてこそ、生徒の職業観が揺さぶられるからです。例えば、職業ごとに違う喜びや厳しさがあることを知れば、生徒は自分の職業理解が浅く、視野が狭いことに気付き、謙虚な姿勢で社会や大人を見られるようになります。個々の家庭や閉じられた「学校文化」の中でつくられた価値観が相対化されるのです。

生徒の課題に応じて連携すべき外部人材は異なる

学校外との連携には、まず生徒の実態把握が重要です。教師が目の前の生徒にどのような力を付けたいかを意識してはじめて、生徒のために何をすべきかも見えてくるからです。これはキャリア教育全般に言えることで

すが、特に外部との連携では、職業体験のねらいを明確にし、職場でどのような姿を生徒に見せてほしいかを具体的に伝える必要があります。そうしないと、生徒の普段の様子を知らない学校外の人たちは中学校が何を求めているのかが分からず、ただ漫然と職場を見せるだけになってしまうでしょう。

生徒の課題によって、連携すべき学校外の人や機関も異なります。例えば、地域について分かったつもりになっている生徒が多ければ、校区内の農家や工場、地域の病院など、生徒にとって身近な大人に協力を求めましょう。「町の小さな工場」が実は社会生活に欠かせない部品を作っていたり、海外に納品したりしていることを、生徒は知らないものです。身近な職場で大人がどのように働き、社会とどうかかわっているかを知れば、生徒はそれぞれの仕事について自分がいかに先入観に縛られていたかを、身をもって感じると思います。そうした実感は単に職場を見学するだけでは得られません。生徒が実際に仕事を手伝ったり体験したり出来るよう、3日から5日ほど時間を確保できるとよいでしょう。

限られた人間関係の中で育ち、知らない相手とのコミュニケーションが苦手な生徒が多ければ、地元から離れた職場を選ぶことも有効でしょう。身近な職場とは違い、数日間に及ぶ体験は難しいことが多く、短時間で主体的に多くを学ぶ必要がありますから、生徒にとって憧れの職場を選ぶと効果的です。ただ、この場合も、身近な職場をじっくり体験する機会は別途設けていただきたいと思います。よく知っていると思っていた職業ほど、体験を通して気付く意外な面が多く、価値観が揺さぶられるからです。

地元での職場体験を積んだ上で地元から離れた場所で体験させるべきか、順番を逆にするべきか。これには正解はありません。生徒の様子を見取って決めていただければと思います。

また、どの職場を選ぶにしても、事前・事後学習を必ず行いましょう。職業体験のねらいを生徒に伝えた上で送り出し、学校に戻ってからは、そこで何を学んだかを生徒同士で共有させるのです。目的を持てば生徒の気付きは多くなり、友だちの体験を知ることで気付きや学びが何倍にもなります。

外部との連携は、共に生徒を育てる仲間づくりになる

学校外との連携を効果的なものにするためには、交渉や打ち合わせなどが必要です。準備に時間が掛かることから、連携への第一歩をなかなか踏み出せないこともあると思います。しかし私は、外部とつながることによって、将来的には先生方の負担は軽くなると考えます。共に生徒のためを思い力を伸ばそうとする人たち、いわば先生方の仲間が学校の外にも出来るからです。活動についても、学校外から出されたアイデアを参考にすれば、新たな工夫につながるかもしれませんね。

3年間を見通して計画的にキャリア教育に取り組むことも大切です。学年間で活動を改善しつつ引き継いでこそ、活動が系統的になりますし、学校外とのつながりも強固になります。学校が一丸となれば、先生方それぞれが負担を分担し合う体制づくりにもつながるのではないでしょうか。

ふじた・てるゆき◎1993年筑波大大学院博士課程教育学研究科単位取得退学。中央学院大商学部助教授、筑波大大学院博士課程人間総合科学研究科准教授などを経て、08年4月から現職。博士（教育学）。

＊プロフィールは取材時のものです

学校事例

神奈川県 横浜市立山内中学校

憧れの場で実感する「相手への思いやり」の大切さ

1年生から段階的にかかわる大人の範囲を広げる

横浜市立山内中学校では、3年間を通してキャリア教育を行う。外部との連携という観点では、1年生は身近な人へのジョブインタビュー、2年生は地域の企業などでの職場体験、3年生は修学旅行で「京ことばのレクチャー」を受けるなど、生徒がかかわる大人の範囲を段階的に広げられるよう計画している（図1）。

■図1　山内中学校のキャリア教育プログラム（抜粋）

1年生	●身近な人にジョブインタビュー 生徒が保護者や地域の方などに仕事についてインタビューし、夏休み明けにプレゼンテーションをする ●職業講演会 地域から講師をお招きし、仕事についての分科会を行う
2年生	●1日職場体験 生徒が地域の企業や店舗などを訪問し、職業を体験。「働くこと」の意味・意義を現場で学ぶ
3年生	●修学旅行での「京ことばのレクチャー」 ●2011年度は、卒業遠足の機会にディズニーテーマパークでの体験学習に参加 上記を通じて、仕事観、職業観を広げる

＊同校の資料を基に編集部で作成

同校の生徒は学習に意欲的で、友だちとの仲も良い。ところが、よく知らない友だちに対しては消極的になったり、初対面の大人を前にすると尻込みしたりする様子が見られた。そこで、キャリア教育では学校外との連携を強く意識してきたと、高瀬茂校長は話す。

「普段の生活で生徒が接する大人は限られています。学校外の大人と触れ合う機会をつくることで、コミュニケーションのとり方など、社会で求められる大切な姿勢や能力を身に付け、職業意識や世界観を広げてほしいと考えました」

憧れの場所での体験により生徒の学ぶ意欲を引き出す

2011年度は、3年生が2月の卒業遠足の機会に、ディズニーテーマパークでの体験学習「ディズニーアカデミー・ワークショップ」に参加した。3学年主任の久保薗（くぼぞの）直美先生は、このねらいを次のように話す。

「これから高校という新たな世界に足を踏み出す生徒に、中学校3年間のキャリア教育の締めくくりとして、どの仕事にも共通する、相手の立場に立って思いやる気持ちの大切さを伝えたいと思いました。ディズニーテーマパークは生徒が大好きな場所であり、憧れの職場でもあります。そうした場所で働く人の姿であれば、生徒は自分から注意深く観察し、少しでも多くのことを学び取ろうとすると考えたのです」

ワークショップは、午前（セミナー講習）と午後（パーク体験）の2部形式。午前中はキャスト（パークの従業員）2人が生徒に、あいさつの仕方や身だしなみなど接客で心掛けていることを、実演を交えて説明する。ゲスト（お客様）に道を分かりやすく教える場面では、相手の目を見ながら笑顔で対応する様子が示された（写真）。どの生徒もキャストの話に引き込まれていたと、3学年担任の田中敏行先生は話す。

「キャストの方が良い例と悪い例を共に示してくれたので、生徒は、キャストが何に気

写真　男性キャストが、ゲスト役となった女性のキャストと3人の生徒に、道案内を実演する。男性キャストは、道順だけでなく、目印となる建物や乗り物などを挙げ、丁寧に道を教えた

を付けているかがよく分かったと思います。表情や相づちの打ち方などによって印象が大きく変わることを感じたようです」

午後は生徒がパーク内を観覧しながら、キャストの働く様子を見学した。

「実際にパーク内で働くキャストの姿を見て、午前中の学びが生徒の印象に強く残ったようです。今まで遊びに来た時には気付かなかったキャストの方の配慮や、仕事に対するプロ意識を実感したと思います」（田中先生）

「どの職業でも、どんな場所でも笑顔と礼儀は大切だと学んだ」

ワークショップの事前・事後学習も行った。前日にはこのプログラムに参加するねらいを伝え、翌日には朝のホームルームの時間に感想を書かせた。キャストの仕事ぶりを尊敬するという声や、学びを今後の生活に生かそうという声が多く見られた（**図2**）。

「生徒は今まで、ディズニーテーマパークは楽しくて当たり前だと思っていたはずです。しかし、ワークショップに参加し、自分が感じる楽しさの裏にはキャストのさまざまな気配りがあることを、身をもって感じたようです。また、普段教師が指導している身だしなみやあいさつの大切さなども、セミナー講習でキャストの方から改めて伝えられたことにより、生徒の心に深く残ったと思います。1年次から『仕事』や『働くこと』に対する意識を高めてきたからこそ、今回の取り組みが学びにつながったと感じます」（田中先生）

今回の気付きは、今後の人生の支えになるだろうと久保薗先生は期待を寄せる。

「生徒は『仕事』に対する意識を深め、立ち居振る舞いに少し気を付けるだけで周りの人がどれほど気持ちよく過ごせるかという、一生ものの気付きを得られたはずです。ワークショップでの学びを卒業式で早速実践し、来てくださった方に楽しんでもらえる式にしようと、生徒と語り合っています」

久保薗先生は、今後の展望を次のように話す。

「更に充実した学習になるよう、事前に1・2年次の取り組みを振り返らせたり、事後に生徒が互いの感想を聞き合い、気付きを共有したりする時間をしっかり確保したいと考えています。また、外部との連携に掛かる費用についても、検討する必要性を感じています。次年度以降、こうした課題を改善し、学校全体の取り組みとして高めていきたいです」

■図2　ワークショップを通して生徒が得た気付き

◎毎日多くのお客さんが来る中、たとえ嫌なことや悲しいことがあっても、ゲストを笑顔で迎える仕事をしているキャストの皆さんは、本当にすごいプロだと感じました
◎どの職業でもどんな場所でも、笑顔と礼儀は大切だということや、相手の立場に立って自分から行動する自主性の大切さを学びました
◎笑顔でアイコンタクトをして元気よく自分からあいさつすると、された方はとてもうれしいということを実感しました。私もこれから心掛けていきたいです
◎以前から、困っている人がいたら自分から行動したいと思っていましたが、これからはキャストの方のように、自分が相手を気遣っていることが相手に分からないように、さりげなく手を差し伸べたいと思います

＊同校の資料から編集部が一部抜粋

校長
高瀬　茂

3学年主任、国語科担当
久保薗直美

3学年担任、英語科担当
田中敏行

横浜市立山内中学校
生徒数◎715人　**学級数**◎21学級
所在地◎〒225-0002　神奈川県横浜市青葉区美しが丘5-4
TEL ◎045-901-0030
URL ◎ http://www.edu.city.yokohama.jp/sch/jhs/yamauchi/

＊プロフィールは取材時のものです

読者のページ
Reader's VIEW

2011 Vol.4 特集「『中学生にする』導入期指導の工夫」へのご意見

このコーナーでは、編集部に寄せられた読者の先生方からのご意見をご紹介します。

＊『VIEW21』中学版のバックナンバーは「Benesse教育研究開発センター」ウェブサイト（http://benesse.jp/berd/）でご覧いただけます。

◎聖徳大・壷内明教授と千代田区立神田一橋中学校・岡田行雄校長の対談で「校長の役割」について述べられていた中で、「校長は普段生徒とかかわる機会が限られている分、生徒の良い面を見て指導する機会が多い」いう話に納得です。私は授業参観によく行きますが、授業をするわけではありません。さまざまな場面で生徒の良さを見付けて担任に伝える、場合によっては全校朝会などで褒めるなど、校長ならではの役割があると思いました。

［鹿児島県／Ｓ中学校／Ｓ・Ｍ］

◎壷内教授と岡田校長の対談で話されていた「教師に『頑張れば出来る』と言われても、現実には計画通りにできない自分がいるわけです」という言葉は、心に重く残りました。ついつい「頑張れ」と口にしてしまいがちなので、その都度、「頑張り方を教えているか」「どう頑張ればよいのか生徒は分かっているのか」を自分に問いたいと思います。

［岡山県／Ｆ中学校／Ｙ・Ｓ］

◎沼津市立原中学校の「学校全体で縦と横の人間関係を育む」という事例が参考になりました。上級生に自信とプライドを持たせる。それを学校文化とすることが大切だと感じました。

［大阪府／Ｙ中学校／Ｙ・Ｔ］

◎東根市立神町中学校が作成しているシラバスは、コンパクトにまとまっていて大変参考になり、自分の教科でも作成したいと思いました。新入生の受け入れを考え始める時期に導入期指導の特集を読んで、非常に良い刺激を受けました。

［東京都／Ｏ中学校／Ｉ・Ｓ］

◎「中１ギャップ」と言われはじめ、久しくなります。小学６年生、中学１年生を担当する教師は、特に気持ちも時間も掛けて、指導に当たっています。ただ、具体的にどのようなことをしていけば効果的なのかということが、まだ模索中なのだと思います。そうした時期に今回の特集は、大変参考になりました。私自身も、学級経営におけるキーワードは「居場所」だと、常々思っています。

［長野県／Ｓ中学校／Ｉ・Ｋ］

◎若手教師が多い本校にとって、導入期指導がなぜ大切なのか、必要なのかが具体的に明示されていたので参考になりました。導入期の課題として７つ示されていましたが、地域や学校の状況に応じた課題もあるでしょう。それらを踏まえながら本校の課題に取り組んでいきたいと思います。

［群馬県／Ｎ中学校／Ｔ・Ｔ］

ご両親を亡くされたお子さま対象

ベネッセ 通信教育奨学制度のご案内

ベネッセコーポレーションでは、震災や事故などによりご両親を亡くされた日本全国のお子さまに、無償で教材をお届けする「ベネッセ 通信教育奨学制度」を2011年に新設いたしました。お子さまの高校卒業までの家庭学習を、〈ベネッセの通信教育サービス〉が全面的に支援してまいります。貴校や周囲にご両親を亡くされたお子さまがいらっしゃいましたら、本制度をお知らせいただけますと幸いです。

◎詳しいご案内は下記サイトをご確認ください
http://www.benesse.co.jp/mirai/shogaku/

◎お問い合わせは講座の電話窓口までお願いします
進研ゼミ中学講座　0120-929-100（通話料無料）
＊一部のIP電話からは042-679-8565へおかけください（通話料がかかります）
＊受付時間10:00～21:00（日曜・祝日・年末年始を除く）

未来を生きる 子どもたちのためにできること

教育情報誌『VIEW21』が発刊当初から
変わらず貫き続けている思いです。
日本の学校教育は先生方の「熱意」が支えている。
だからこそ、我々も全力で
先生方に役立つ情報を発信することにこだわりたい。
『VIEW21』は、これからも
全国の先生方と共に子どもたちの未来を見つめ、
今と未来を結ぶ教育を提案していきます。

Benesse® 教育研究開発センター『VIEW21』編集部

編集後記

「数値に見える学力だけでなく、生徒が学んだ知識を日常生活の中で活用できているのか。学んだ内容を自分の言葉に置き換えて表現し、きちんと相手に伝えられているのか。そこまでできなければ満足しない」。今回の取材で先生方からいただいた言葉です。見取りや評価の背後にある先生方の思いや熱意を、少しでも誌面を通してお伝えできていれば幸いです。今年度もどうぞ宜しくお願いします。（佐藤）

VIEW21 中学版 2012 Vol.1　2012年5月21日発行／通巻第313号

発行人　新井健一
編集人　原 茂
発行所　（株）ベネッセコーポレーション
Benesse教育研究開発センター
印刷製本　凸版印刷（株）
編集協力　（有）ペンダコ
執筆協力　二宮良太、中丸満
撮影協力　荒川潤、川上一生
イラスト協力　カモ、幸剛

◎お問い合わせ先
VIEW21編集部
〒206-8686
東京都多摩市落合1-34
電話　042-311-3391
＊3月26日より移転いたしました

©Benesse Corporation 2012